

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla' gugs tshe' gugs) :
ニンマ派伝承の祈禱書の訳注と儀軌の記述

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-02-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村上, 大輔
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00009349

資料 Research Resource

「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」
(bla 'gugs tshe 'gugs)

——ニンマ派伝承の祈禱書の訳注と儀軌の記述——

村 上 大 輔*

A Tibetan Soul-retrieval Ritual (bla 'gugs tshe 'gugs):
Translating the Prayer Text of a Nyingma Tradition

Daisuke Murakami

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 はじめに | 4.3 儀軌（治療）の実際 |
| 2 「魂を喪失する」病，ラサでの治療手段 | 4.4 むすびにかえて |
| 3 チベットの宗教文化における「ラ」(bla) | 5 テキストについて |
| 4 ラグツェグの記述 | 6 テキストの転写 |
| 4.1 状況説明 | 7 訳注 |
| 4.2 儀軌の前段階 | 8 原テキスト |

*駿河台大学

Key Words : soul, ritual, shaman, Lhasa, Tibet

キーワード : 魂, 儀礼, シャーマン, ラサ, チベット

1 はじめに

チベット・ヒマラヤ文化圏では、仏教の教義とはかけ離れた民間信仰の儀軌が広く存在している。本稿で取り扱う「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs) の儀軌¹⁾はそのひとつである。ラグツェグとは「消えてしまった」とされる魂 (bla) を呼び戻す呪術 (民間医療) であり、現在でも多くのチベットの人々にとって非常に身近なものとなっている。チベット高原に仏教が広まる以前の古代ボン教、あるいは Stein (1972[1962]) のいう「名も無き宗教」(nameless religion) と深い関連があると考えられ、事実、この儀軌はその性格からして極めて世俗的なものであり、その目的および構造にはシャーマニズム的な要素が看取される²⁾。

本稿は、筆者が 2013 年 5 月に中国チベット自治区ラサにおいて蒐集したラグツェグの祈祷書の訳注と実際の儀軌の記述である。当該テキストは、ラサのヌプ・リクスムゴンボ寺 (三部主尊寺・西院) で蒐集し、儀軌そのものは当寺院で参与観察したものである。この寺院は、ラサの東方、メトゴンカ県にあるディクン・カギュ派のヤマリ僧院 (g.ya'ma ri dgon) のラサ分院である。カギュ派でありながら蒐集したテキストはニンマ派のものとなっており、それは「カニン」(カギュ派とニンマ派の混淆) を自負する当僧院 (あるいはディクン派) の特徴といっていだろう。

魂を取り戻す「ラグツェグ」(「ラル」(bla bslu) ともいう) の儀礼に関しては、これまで僅かながら報告されてきた。Ferdinand Lessing (1951) は、18 世紀の学僧トukkan・ロサン・チョーキ・ニマ (1737–1802) の著したゲルグ派版のラグツェグの祈祷書³⁾ の中国語訳をもとに、欧米圏で初めて儀軌の詳細について紹介・分析した。同じく文献研究では、Charles Bawden (1962) や Alice Sárközi and Alexey G. Sazykin (2004) によるモンゴルの祈祷書の報告がある。文献とフィールド両面からアプローチしたものでは、Samten Karmay (1998[1987]) による北インド・ヒマチャルプラディッシュ州のボン教寺院での儀軌の紹介と精緻なテキスト分析がある。また Charles Ramble (2009) は、ネパール・ムスタン地方のカゲベニで蒐集したボン教ラマによる儀軌の実際を、祈祷書の英訳とともに紹介している。本稿で紹介するラグツェグは、Karmay や Ramble と同じく文献および具体的な儀軌を扱うものでありながら、ボン教ではなく仏教の寺院で蒐集されたも

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

のであるとともに、チベット本土からの初めての詳細な報告となる。ニンマ派版祈祷書は、上記他宗派のものとは構造的には類似性が見られるが(種々の俗神に奪われた魂を、神仏の加持力により奪還する)、内容的には全く区別されるべきものとなっている。各々のテキスト間の精緻な比較によって儀軌とテキストの関係性を提示し、チベットの(魂を取り戻す)儀軌一般に関する理論化を試みることは学問的意義があると思われるが、それは別の機会に譲ることとする⁴⁾。本稿では、上記文献に適宜触れつつ、あくまで現代のラサで行われているニンマ派版ラグツェグの祈祷の詳細な記述に焦点を絞り、将来の理論化のための重要な資料のひとつとしたい。

最後に、本研究の特殊性について若干の付言をしておく。現在中国領となっているチベット文化圏、特にチベット自治区ラサにおいては地元当局による外国人監視が非常に厳しく、十分なフィールド調査をするには困難な状況となっている。また一方、近年ラサは現代化が著しいことから、伝統的な習慣や宗教儀礼は失われてしまったと外部の研究者は想定する傾向にある(実はそれは、局所的には全く正しいものの、一方的な偏見である場合が少なくない⁵⁾)。この二つの理由により、ラサでの伝統宗教の研究は他のチベット地域と比べ極めて不活性となっており、それがゆえに本稿は、非常に稀有な報告となるであろうと確信している。また、本研究の領域そのものの特殊性もある。日本および世界のチベット学では仏教や歴史の文献研究は進んでいるものの、体系性の欠く民間信仰の儀軌に関してはその研究が著しく立ち遅れている。これは様々な理由が考えられるが、次の理由もそのひとつである。本土でも亡命社会でもチベット人知識人のあいだで、ボン教や土着の宗教儀礼に対して「迷信である」(rmongs dad)(=仏教的でない)という否定的な見解を耳にすることがよくあるが⁶⁾、これがおそらくチベット学における民間信仰研究に冷や水を浴びせていると考えられる。チベット人知識人自身がある種の宗教伝統を無意識裡に抑圧し、(外国人研究者など)外部に対して積極的には開示しないことがある。本稿で扱うラグツェグの儀礼とその世界観も、そういった抑圧の対象に含まれようが、日常生活レベルでは当のチベット人が(少なくとも表面上は)なんの疑念もなくその儀礼を他人に勧めたり、自ら享受したりしている。

2 「魂を喪失する」病，ラサでの治療手段

テキストの訳注と儀軌の記述に入る前に，若干の準備が必要である。本章と次章では，「魂を喪失する」病にまつわる民族誌的な説明を試みたい。

まず，「魂が消えてしまう」とはどういうことなのだろうか。恐怖や驚愕，極度の心配，そして悲嘆。それらネガティブな感情が度をを超えてしまうと，「魂を失ってしまった」(bla shor shag)などと語られることがある。症状としては，いつも「心ここにあらず」のような状態で鬱病のようになってしまったり，またその逆に，どこにいても心が落ち着かず，常にどこかに移動したいという衝動にかられたりする。生来そういった性格の人間はどこにでもいるものだが，そういったケースはここでは該当しない。つまりは，交通事故や手術，または肉親の死など，なにかしらの突然のアクシデントが契機となって，精神の安定に異常をきたしてしまう，そういう「病」なのである。人々の間では単に「心が喜んでない」(sems ma skyid pa)などと言われることもあるが，僧侶のなかには「体と心が分離してしまった」(lus sems kha bral)と一歩踏み込んで説明する者もいる⁷⁾。

さて，ここまで「魂」という言葉が無批判に用いてきたが，実際に魂が消えて死亡するわけではない。チベット語のラ (bla) の訳語として，日本語・中国語とも「魂」という言葉が慣習的に当てられるが，少なくとも上記のような文脈においては，「生命力」や「生氣」，「生命の素」などと解釈したほうがよりふさわしいだろう。実際，英語圏では bla の訳語として，“soul”のほか“life-force”や“vital principle”，“life essence”などという単語が当てられることがある。ただ本稿では，原語のニュアンスを保持する理由から「魂」(もしくは「ラ」)を用いる。チベット語の口語でも，「ぶったまげた！」というときに「魂が潰れそうだった」(bla chad grabs byas song)などと表現することがあるのである。余談であるが，日本語の「たまげる」は「魂消る」から来ている。

「魂が消えてしまう」というが，実際にチベット人の用いる表現は多くの場合，次のようなものである。「(誰かが)魂を持って行ってしまった！」(bla skyel shag)。では一体，誰が持って行くのであろうか。それは，第7章の訳注で示すよう，龍神 (klu) やツェン (brtsan)，マモ (ma mo) やゲルポ (rgyal po) と呼ばれる種々の俗神たちである。彼らは魂を掠め取る霊的存在として，「命の主」

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

ソダ(srog bdag)などと総称で呼ばれる(fol. 3b)。驚愕や悲嘆で体から飛び出してしまった魂をソダが奪うのである。ソダは、村の中や水場、谷奥や山頂、僧院や聖地などあらゆる場所に存在しているとされるが、なかには草原に徘徊しているものもいるといわれる。「草原の上では、むやみに昼寝をしてはいけない」などとチベットの遊牧民の間で戒められているが、それはソダが、寝ている間に浮遊してしまった人間の魂を奪ってしまうとの俗信からである。

ラを取り戻す治療・呪術であるが、チベットの宗教伝統のなかには大きく分けて二種類ある。ひとつは、シャーマンの施術によって悪霊の手中にある魂を奪還するものである(Mumford 1989: 167-179; Nebesky-Wojkowitz 1993[1956]: 551-552)。筆者のインフォーマントのひとり^{ティンリー}は、チベット自治区の定日にあるボン教の村落出身だが、彼によるとその村には「サンマ」(gsang ma か?)と呼ばれる女性のシャーマンが住んでおり、悪霊から「魂を取り返す」(bla len)ことをその生業としているという⁸⁾。このようなシャーマンによるラの奪還は、現在のラサでは一般的ではない。少なくとも筆者がラサに滞在している間(2000～2014)は、そのような話は一度も見聞きしたことがなかった。その代わり、僧侶によって執り行われる儀礼(呪術)が最も一般的かつ効果的な治療法と見なされている。本稿のテーマである「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)である。

ラグツェグは魂を本人に戻すことを目的としているため、本来では、脱魂してしまった本人の最も馴染んだ空間——彼(女)の住み家——で執り行われるのが理想とされる。現に農村などでは、現在でもそのようになされるようである。しかしながら、ラサでは様々な理由により僧院内で行われるのが一般的となっている。最も有名なものはジョカン寺の数キロメートル北方にあるタブチゴンパ(grwa bzhi dgon)でのラグツェグである。タブチゴンパは、ラサの三大寺院のひとつであるセラ寺の分院であり、現世利益を強力に叶えてくれるとされるタブチラモ女神を祀っている⁹⁾。毎日、特に吉祥日(tshes bzang)とされる水曜日¹⁰⁾には、多くのチベット人巡礼者で非常に賑わっている。このタブチゴンパの本堂内、タブチラモの眼下でラグツェグは毎日執り行われるのだが、儀礼そのものは極端に簡易化され、非常に短いものとなっている。本来ならラグツェグは、一人に対して儀式を一通り執り行うはずなのだが、タブチでは一日当たり数十人以上(特には五十人近く)の「患者」がいるため、彼らを相手に一斉に執り行ってい

る。用いられる祈祷書はトゥカン著のゲルグ派版のものだが、それに明示されているプロセスもその大部分は省略され、非常に単純化されている。

このような効率化・単純化の背景には、様々な理由が考えられよう。まず一つには、複数の僧侶を自宅に招いての半日がかりの儀礼では、お布施も高額になるうえ、手軽に済むのならそれで済ませたい多忙なラサの人々にとってはあまり歓迎されない。しかし、より根本的な理由がある。それは、ラサ在住の僧侶の数が、この数十年来非常に少なくなっていることである。各僧院に属することのできる僧侶・尼僧の数は地元当局によって厳しく制限されており、特に 2008 年 3 月に勃発したラサの大規模な抗議デモ・暴動以降、締め付けは厳しくなっている。俗人の儀礼に対するニーズは依然強いものの、執り行うことのできる僧侶が十分にいないのである。1990 年代には、セラ寺や北京路沿いにあるムルゴンパ (rme ru dgon)、ツェモリン (tshe smon gling) などでも細々と行われていたようであるが、今 (2014 年の時点) では行われなくなっている。

本稿で紹介するヌブ・リクスムゴンボのラグツェグは、部分的な簡易化は散見されるものの、個々の患者に対して儀礼は個別に行われるうえ、基本的には祈祷書のマニュアルに丁寧に沿っており、複雑なプロセスもほぼそのまま保持されている。その詳細については第 4 章に譲るとして、ここでは最後に、ひとつの事実読者の注意を喚起しておく。

それは、僧院という仏教の空間において、ラグツェグというあからさまな現世利益の祈祷が行われているということである。因果律 (las rgyu 'bras) という仏教の中心教義は、その流れに抗おうとする呪術や魔術といった土着の民間信仰とは本来相容れないものであろう (e.g., Lessing 1951: 264–265)。ラグツェグの祈祷はその内容に厳密に従うならば、僧侶が自身の加持力でもって仏教の神仏を召喚しては悪霊の世界に赴き、失われた魂を取り返すことをミッションとしている。チベットのラマはある意味において、“Civilized Shamans” 「文明化 (仏教化) されたシャーマン」であるという議論があるが (Samuel 1995)、このラグツェグの儀礼は異なる二つの宗教モードが鮮烈に交錯するフィールドとなっている。現代のラサにおいて、ラグツェグの祈祷が大々的に営まれるのは、セラ寺やデブン寺などのゲルグ派の大僧院ではなく、タブチラモ女神という仏教の理想とは相容れない俗神の下においてであることは決して偶然ではないと思われる。

3 チベットの宗教文化における「ラ」(bla)

本章では、ラグツェグの儀礼の背景をより深く理解するため、チベットの宗教文化においてラ（魂）とはどういった存在なのか議論してみたい。

現世利益の呪術と仏教の教義の矛盾について先に触れたが、ラ思想においてはよりファンダメンタルな矛盾が浮上する（Lessing 1951: 265; Karmay 1998[1987]: 311; Tucci 1988[1980]: 192）。仏教においては——特に、チベット仏教主流派であるゲルグ派などにおいては——魂という「実体」は認められていない。人も動物もモノもすべてのものは実体があるように見えるだけであり、原理的にはすべての存在者は「空」(stong pa nyid)とされ、世界は縁起の働きによって離合集散している。まるで自律して存在しているかのように振舞うものもあるが、それは一時的な仮の実体にすぎないのである。生命の根本（これ以上細分化不能の命の本質）のように思われるラも無論例外ではなく、その永遠の存在を認めることは迷信に繋がる。その代わりに仏教で措定されるものが「ナムシェー」(nam shes)という概念である。これは過去生の記憶を保持し、輪廻を超えて相続する、常に変容し続ける^{せい}生のデータのようなものである（次の転生に向けて死んだ肉体から出離するのはラ（魂）ではなく、ナムシェーであるといわれる）。このナムシェーとラは教義の上では明確に区別されているものの、大衆レベルの理解では次に示す類似概念とともによく混同されやすい。

例えば、ソ (srog 命) やツェ (tshe 寿命)、そしてウ (dbugs 息) といった概念がある。「ソ」は血液や心臓などと深い関連があるとされるが（Stein 1972[1962]: 226; Tucci 1988[1980]: 192）、肉体的な生命力や命そのものを指す（チベット語の口語において「殺す」は「ソを切断する」(srog gcod) などと表現される）。また「ツェ」は、寿命や人生といった意味であるが、時間性を含んだ概念であり、ある一定の命の長さを指し示すものである。息や呼吸を意味する「ウ」であるが、人間は死後、鬼神によってその「ウ」がラサ南方のサムイエー寺に運ばれる (dbugs skyel) との俗信が広く存在し、ラとの類似性が窺える。これらの言葉のほか、「セム」(sems 心) や「イ」(yid 意) といった概念が存在するが、後者ふたつはナムシェーとともに仏教的な文脈で援用される傾向があるのに対し、ラやソ、ウなどはそれ以外の文脈で好まれるように思われる。こういった意味上・コ

ンテキスト上の差異が存在するものの、ラという言葉は他の類似語に置換されたり、それらと並列的に用いられったりすることが多い。現に、ラの喪失の病は先に見たよう「心（セム）と体が分離したもの」と形容される一方、「ラグツェグ」とはそのまま直訳すると「魂（ラ）引き、寿命（ツェ）引き」（bla 'gugs tshe 'gugs）となる。また、本稿で扱う祈祷書のなかでは、ラ（魂）の代わりにソ（命）が多用されているような個所が多々存在する一方、ウ（息）という言葉もラと同義語のように用いられている。

ラ（魂）を以上のような類似概念と対比させてそれ自体で定義するのは困難をともなうが、ラグツェグの儀礼を含め具体的なコンテキストでラがどのように扱われるのかをみると、その輪郭がはっきりしてこようか。例えば Samten Karmay は、ラを明確に描写する説明として、敵を殺める呪いの呪術書から引用する。

呪術を行使する時、それは肉体を殺すのであろうか、それとも心を殺すのであろうか？ 肉体は物質からできている。物質というのは殺せないものである。心（セム）はどうであらうか。心は空（くう）である。それゆえ殺すことはできない。肉体も心も殺すことはできない。ラは、羊飼いのいない彷徨っている羊のようなもので、それをこそ（呪いをかけるために）召喚しなければならない。¹¹⁾

こういったラの浮遊性・被操作性に関しては、ラの喪失の病のほか、もうひとつ別のチベットの宗教伝統が思い出される。

実はラというものは、個々の人間だけではなく、家族や村などの共同体のものがあるほか、神仏のラというのも存在する。そして、その本来の持ち主からラ、あるいはその一部が離れ、様々な自然の事物に宿ることがあると信じられている（Nebesky-Wojkowitz 1993[1956]: 481–483; Stein 1972[1962]: 226–229）。その「魂の居所」となっている場／モノは、「ラネー」（bla gnas）と呼ばれる。ラネーは例えば、山（bla ri ラリ）や湖（bla mtsho ラツォ）であることもあれば、樹木（bla shing ラシン）や岩石（bla rdo ラド）であることもある。また、羊（bla lug ラル）や馬（bla rta ラタ）、野鳥（bla bya ラチャ）などの動物である場合もある。いずれにせよ、そのラの持ち主とそのラネーは、その生命力と運命において分かち難く結び付けられていると考えられている。例えば、中央チベットのラモラツォという湖（写真 1）は、ダライ・ラマの守護女神であるパンデンラモ（吉祥

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

天女)の魂が宿っているとされ、ダライ・ラマの転生者を探索するときにはラモラツォの湖面にビジョンが現われるという。また、ラサにあるダライ・ラマの夏の宮殿ノル布林カのすぐ北側にはギャツォと呼ばれる部落があるが、その中心には魂の樹木(ラシン)が鎮座しており、村人の土地神(yul lha)になっている(写真2)。村人たちはラシンを敬う徴のひとつとして、家屋はラサでは珍しくすべて平屋となっている。また別の地方では、子供が生まれたら、そのラネーとして樹木を植えることもあれば(Samuel 1995: 187)、ある湖をラネーとしている家系が途絶えた際、その湖が干上がったたり、また、ある山をラネーとしているラマ



写真1 ラモラツォ (パンデンラモの魂が宿っているとされる)
(2006年10月4日 筆者撮影)



写真2 ラサの西郊外のギャツォ村にあるラシン (魂の樹木)
(2011年6月3日 筆者撮影)

が、その山が何者かによって削られるとともに病気になったりする (Stein 1972 [1962]: 227)。チベットに伝わるケサル神話でも、ケサル王が敵を倒すのにそのラネーである樹木 (ラシン) を切断したり、湖 (ラツォ) を干上がらせる話がある。Tucci は、チベットの民間信仰に詳しい著書のなかでラを次のように説明している。上に引用した呪いの説明と並行して読まれたい。

ラとはある種、個々人の生き写しのようなものである。ラを支配下に置くことは、そのラの属している人間を支配下に置くことを意味している。確かにラは、物体のように破壊することは難しい。しかし、それは痛めつけ、摩滅させることもできる。¹²⁾

個人や共同体のラが自然の事物へ拡張・浸透してラネーとなり、そしてそれは、外部環境に曝されているため、常に傷つけられやすい存在なのである。つまり、ブラック・マジックのターゲットとなりやすい (故に個々人のラネーは秘匿にされるのが常である)。

このラ＝ラネーの関係を別の角度から見てみよう。「魂」を指すラ (bla) は、「神」を表わすチベット語のラ (lha) と発音が類似しており、過去においては魂と神の両者は、概念的には明確に峻別されていなかったとの指摘がある (Stein 1972 [1962]: 227; Karmay 2003: 68–69)。例えば、ラグツェグの祈祷でもたびたび召喚され¹³⁾、個々人の守護神でもある父神「ボラ」(pho lha) は、彼 (女) の誕生とともに発生し、普段は身体 (特に肩) に宿っているとされるが、この神はよく岩や樹木など自然の事物に投影され、その当人の家族や村の土地神ユラ (yul lha) と同一であると見なされたりする。つまり、ラ (魂) とラネー (魂の居所) の内 - 外の関係性は、そのままパラレルに、神と神の宿る場の間にも見られるのである。事実、神仏や俗神の宮殿や棲み処と呼ばれる山や湖は、同時に、個々の人間や共同体の「ラネー」となっている場合が少なくない (Stein 1972 [1962]: 228)。つまり、山であれば、bla ri であると同時に lha ri でもあり、湖であれば、bla mtsho であると同時に lha mtsho となる場合がある。さらに付け加えるならば、神観念と魂観念はもともと類似した認識体験でありかつ、それは身体 (精神) と外部環境のあいだで滑らかに連続的に存在していたが、チベットに仏教が導入され社会の権力化が加速した結果、神概念が抽象化されていき、神が人間－外部環

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

境の境界付近からより外部寄りに存在するように（認識されるように）なったという指摘もある¹⁴⁾。

魂の概念と神のそれとの同一性（もしくは相互浸透性）の議論については、小稿の目的を離れてしまうのでここでとどめておく。しかし、ひとつ事実をあげるならば、ラの喪失時に俗人でもできる最も有効な治療というのは、実は、当人の生まれ故郷の「ポラ」や「ユラ」に参拝に詣でることだとラサでは言われている。病気になったり、悪霊に憑依されたりして、ラが弱くなったときも同様である。ポラ参拝がまず最初に勧められる¹⁵⁾。この習慣にどれだけ古代の痕跡を見るかは、研究者によって（各々のフィールドによって）異なるであろう。

4 ラグツェグの記述

4.1 状況説明

本稿で紹介するラグツェグの儀軌は、ラサのヌプ・リクスムゴンボ寺（nub rigs gsum mgon po'i lha khang）で観察されたものである。この寺はジョカン寺の南西約数百メートルに位置しており、ジョカン寺の東西南北を守護する三部主尊寺（リクスムゴンボ寺）の西方（ヌプ）にあたる¹⁶⁾。ラサの東方、メトゴンカ県にあるディクン・カギュ派のヤマリ僧院（g.ya' ma ri dgon）のラサ分院であり、三人の僧侶が三年毎に交替で本寺から派遣されている。このヌプ・リクスムゴンボ寺（以下、ゴンボ寺と略す）は、ジョカンの南西に広がるルグ（klu sgug）と呼ばれる区画の一角にあるが、このルグ界限には、地元のシャーマンの宣託で賑わう集合住宅ゴラ（sgo rwa）があるほか、ミカ（mi kha）と呼ばれる「風評霊」（噂を広める悪霊の一種）を祓う祈祷が路地で頻繁に行われるなど¹⁷⁾、ラサの都市空間のなかでも一種独特な空間となっている。また、ルグにはラサ以外の土地から移り住んだ人々が多く住んでいたせいも、つい最近まではやや「治安の悪い」（特に、漢民族にとって）とされる場所でもあった。こういった雰囲気のかゴンボ寺は、路地の奥まったところにひっそりと隠れるようにして立っており、ラ（魂）を取り戻すラグツェグの儀礼は、その小さな本堂の奥で日々細々と繰り広げられている。

その本堂にはその名のとおりに、リクスムゴンポ＝三部主尊（観音菩薩・文殊菩薩・金剛手菩薩）が本尊として祀られているほか、その脇には、ディクン・カギュ派の護法神であるアプチ女神の像も鎮座している¹⁸⁾。ゴンポ寺はジョカン寺にも近いことから、吉祥日（tshes bzang）には一日約百人近くの巡礼者が訪れていた。筆者のインフォーマントである同寺の僧は、ラサだけではなく様々な地方からの巡礼者が訪れると言っていたが、筆者の観察した限りでは、その半数近くはゴンポ寺の本寺のあるメトゴンカ県出身のチベット人であり、僧侶たちとは同郷の連帯で繋がっているようであった。ラサの主流派であるゲルグ派ではなく、少数派のディクン・カギュ派に縁のある人々なのである。巡礼者たちのなかには、ラグツェグの儀礼が行われている本堂の片隅を一瞥して通っていく者もいれば、立ち止まってその儀礼をじっと観察する者もいた。これから説明するよう、ラグツェグの儀礼はビジュアル的に興味をそそられ、チベット人にとっても「ちょっとした見世物」（ltad mo chen po）なのである。筆者自身も、その儀軌のスペクタクルな流れに感じ入ったのが、本研究の最初のきっかけであった。

儀軌のフィールド調査の期間は、2013 年 5 月から 6 月にかけてである。ラグツェグの儀礼は一日数回（一回あたり 30 ～ 40 分ほど）ほど執り行われるが、筆者は計十五回ほど儀礼に立ち会う機会があった。主なインフォーマントは、当時ゴンポ寺に赴任していた三人の僧侶であり、彼らと別の寺院の僧侶たちから儀軌の詳細と祈祷書の内容に関して情報を得た。

4.2 儀軌の前段階

魂を失ったとされる「患者」は多くの場合、家族など付き添いの者に連れられてゴンポ寺に直接やってくる。もし、本当に失ったのかどうか、儀礼が必要なのかどうか不確かな場合は、儀礼の前に僧侶がその場で賽子占い（mo）をして判断を下す場合がある。そして、執り行う必要がある、もしくは、そのほうが無難であろう、などと判断されれば、ラグツェグの日取りを指定される。ラグツェグは原則として、個人の運気が高いとされる「魂の曜日」（ラサー bla gza'）に執り行われるが、それは個々人の生年の干支によって異なっている。ラサーは、チベット占星術（dkar rtsis / nag rtsis）の暦で簡単に調べることができ（写真 3）¹⁹⁾、それによると（表 1）のようになっている。

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

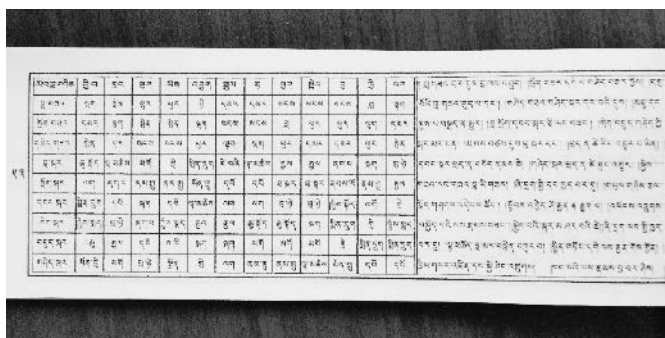


写真3 チベット占星術の暦「ロト」(lo tho)
(2013年5月24日 筆者撮影)

表1 干支と「魂の曜日」(ラサー)の対応表

干支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
魂の曜日	水	土	木	木	日	火	火	金	金	金	月	水

金曜日がラサーである干支が三つあるため、自然、金曜日にはラグツェグの儀礼の回数は増え、時には一日に十回（十人分）近く行う場合もあるようである。ちなみに、この暦のラサーの対応表のすぐ隣には「呪いをかけるには、その相手のラサーが終わろうとしているときに効力を発揮する」などとも記されている。前章で見たラに対する呪いの風景の断片である。

さて、「患者」（以下、「クライアント」と記す）が儀礼に臨んで前もって準備する物品について触れておく。それは、トルコ石 (g.yu)、バター茶の木椀 (shing phor)、そしてお布施である。トルコ石（ユ、もしくは、ラユ）は、ラグツェグの儀礼が終わった後、ラがこれからは簡単には飛び出さないよう「御守」として、もしくは、魂の身代わり＝ラネーとして（危機のときには、自身の魂の代わりに割れ、犠牲になってくれるという）、クライアントが身に着けるものとなる。バター茶の木椀は、結婚した時、新しい家に住み始めた時など人生の転機に買い求められることが多いが、チベットでは以前はこの木椀は民族衣装チュパの内ポケットに肌身離さずいつでも携帯しているような大切な日常品であった。お布施はクライアントの信心次第であり、個々人によって額は異なる。筆者の見たところでは、一度の治療（儀礼）で十元のお布施をする者もいれば、数百元以上置い

ていく者もいた。

4.3 儀軌（治療）の実際

クライアント持参のトルコ石と木椀のほか、儀礼のために必要な物品は以下のものである（写真 4, 5）。これらはゴンボ寺側で準備されている。なお（ ）内は、以下の説明および訳注で頻用される物品の呼び名である。

- 雄の羊の右脚の大腿骨
- 雌の羊の左脚の大腿骨
- 五彩色の祈祷の矢（ダタル／ツェタル）
- 六色（白・黒・赤・橙・青・緑）の糸
- バターで作られた羊のフィギュア（ラスク）
- 牛乳で満たされた^{たらい}盥（ミルクの湖）
- 白黒の賽子^{サイコロ}，それぞれ一個ずつ
- 白黒の小石，それぞれ六個ずつ
- ド（トルマ）

儀軌の大まかな流れは以下のようにになっている。筆者自身の観察した儀軌と僧侶たちの解説，そして祈祷書（第 6～8 章）と照らし合わせながら，儀軌そのものを記述・再構成してみたい。なお括弧内は，対応する祈祷書のフォリオの頁である。



写真 4 儀礼の用具
（2013 年 5 月 8 日 筆者撮影）



写真 5 ラスクとトルコ石の入った木椀
（2013 年 5 月 8 日 筆者撮影）

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

- ① 悪霊の代替物ド (mdos) について (fol.1b)
- ② クライエントの身代わりを悪霊に捧げる。そして、魂を捕えている悪霊たちの縄を解く (fol. 2a～5a)
- ③ 様々な悪霊からラを取り戻し、クライアントの身体に安定化させる (fol. 5a～6a)
- ④ 神仏・ダーキニーなどの力によりラを呼び戻す (fol. 6a～8b)
- ⑤ ラスクを回す〔診断1〕 (fol. 8b～12a)
- ⑥ 小石を取る〔診断2〕 (fol. 8b～12a)
- ⑦ 賽子をふる〔診断3〕 (fol. 10a～12a)
- ⑧ 締め祈祷 (fol. 12a～14b)

以下、①から⑧まで順に解説する。

① 悪霊の代替物ド (mdos) について (fol. 1b)

祈祷書のフォリオ (1b) では、「ド」(mdos) について解説されている。ドとはカラフルな糸を幾何学模様編み込んだ網状の法具であり、チベットの民間儀軌では多くの場合、神や悪霊を捕えるために用いられる (Nebesky-Wojkowitz 1993[1956]: 369–397)。しかし本ラグツェグでは、ドのもうひとつの用途である神霊の一時的な依り代として使われており、しかも実際の儀軌ではその形状は網状ではなく、水やツァンパ (大麦を炒て、粉にしたもの)、バターなどを練りこんで作られたトルマ (gtor ma) となっている (写真 6)。魔犬と魔鳥、そしてそれらを付き従えている悪霊の三体で一組のトリニティとなっており、本儀軌のド (トルマ) は、そのトリニティを中央、そして東西南北にひとつずつの計 5 組、配置させている (図 1)。これをインフォーマントは「魔の砦」(bdud mkhar) と呼んでいた。なお、(写真 7) は筆者にトリニティのあり様を具体的に示すためインフォーマントが試験的に作ってくれた、各トリニティの模擬フィギュアである。

(写真 6) に見られるようトルマの本体は黒色に塗られているが、ひとつ、土色 (「白色」と呼ばれる) のトルマが黒色トルマのすぐ前にある。これはクライアント自身の代替物「ル」(glud) であり、人間の形をデフォルメしたような形状になっている。クライアントの魂が悪霊に捕らえられている様子を示している



写真6 ド（トルマ）
（2013年5月29日 筆者撮影）



写真7 悪霊，魔鳥，魔犬のトリニティ
（2013年5月26日 筆者撮影）

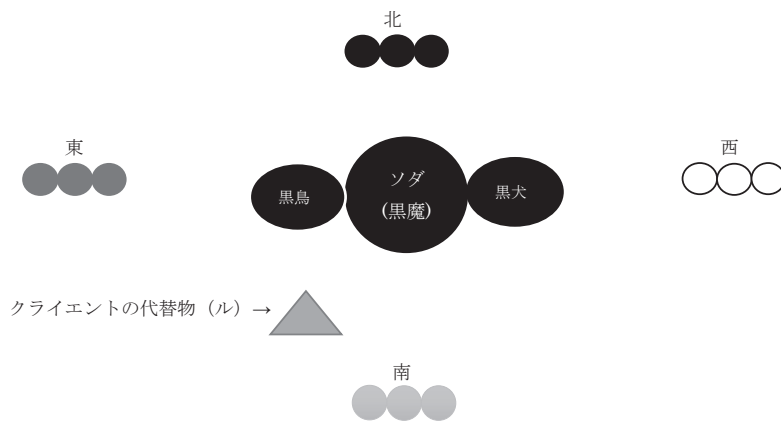


図1 ド（mdos）の構造

ものであるという。

また、魔の砦の左右にはトルマが二体ずつ置かれている。一方は土色（白色）であり、もう一方は黒色であるが、インフォーマントによれば、前者は神（lha）、後者は魔（bdud）だという。そのアイデンティティについては不明であり、祈祷書においても明記されていないが、おそらくは儀軌の後半、ラが帰還してきたかどうかを診断するために言及（召喚）される神（白）・魔（黒）と関連があらうと思われる。

なお上記のドやル、トルマも数日に一度作り替えられるのみで、各クライアントのために毎度新しく作られることはなかった。さらにそれらは比較的単純な形

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

状であった。この点は、ゴンポ寺のラグツェグの簡略化のひとつだと言えよう。

② クライエントの身代わりを魔に捧げる。そして、魂を捕えている魔の縄を解く
(fol. 2a ~ 5a)

クライエントは、牛乳の入った盥を挟んで、儀軌を執り行う僧の前に座る。僧は、クライエントの名前、生年の干支(lo rtags)と五行(khams)を尋ねながら、六色の糸をクライエントの体に巻き付ける。そして、シンバルや太鼓を鳴らしながら読経を始める。

(図1)に示すような魔(bdud)の世界の描写が始まり、クライエントのル(代替物)を差し出す代わりに、彼(女)のラをこちらに戻すよう魔たちに訴えかける。上記の六色の糸の一方はクライエントに、もう一方は先に描写した悪霊のド(トルマ)に繋がれている。これは、様々な種類の魔が、クライエントの魂を縄(zhags pa)でもって捕獲している様子を表わしているものと思われる。「縄を切断し、縄を解く」段の祈祷が終わるとともに、僧はクライエントに巻き付けられている六色の糸を取り外し、ドのそばにまとめて置く。なお、祈祷書のマニュアルによれば、フォリオ(4a)の段から縄をクライエントに掛けると書かれているが、実際の儀軌では読経の最初の段であるフォリオ(2a)の段階で掛けていた。

③ 様々な悪霊からラを取り戻し、クライエントの身体に安定化させる (fol. 5a ~ 6a)

祈祷書にあるよう、本来ならば、この段が終わった時点でドとルは本堂から僧院外に運び出され、三叉路や十字路などに打ち捨てられる。悪霊がすでにこのドに憑依しているとの解釈からである。しかし先に述べたよう、ゴンポ寺の儀礼ではドとルはリサイクルとして使われるため、この放逐の部分は略されている。

またこの段においては、僧が白黒それぞれ六個の小石に真言を吹きかけ、「ミルクの湖」('o ma'i mtsho)と呼ばれる、牛乳を満たした盥のなかにそれらを投げ込む。そして、「ラスク」(bla gzugs)と呼ばれるバターでできた羊のフィギュアに真言を吹きかけ、それをクライエントの持参した木椀のなかに入れ、「ミルクの湖」に浮かばせる。ただ祈祷書では、次のフォリオ 8b の段階で、小石やラスクを「湖」に入れると書かれており、このあたりは特に厳格ではないようであ

る。

④ 神仏・ダーキニーなどの力によりラを呼び戻す (fol. 6a ~ 8b)

この段の最初には、クライアントの名前、干支、そして五行が三回繰り返し唱えられるが、このあたりから祈祷僧は、五色の祈祷の矢「ダタル」の端を片手に持ち、それを天に向けて緩やかに回転させ始める。この段では、様々な神仏とあらゆる方角にいるダーキニーの加持力を召喚させ、ラを呼び戻そうとする。ダタルはその間ずっと回転させられる。

⑤ ラスクを回す [診断 1] (fol. 8b ~ 12a)

祈祷僧が、ダタルの矢先をミルクの湖に浮かんでいる「ラスク」に持って行き、そっと軽く触れる (写真 8)。するとラスクは回転し始めるが、それと同時に、祈祷書のフォリオ 8b の四段目「フム！」から読経が始められる。太鼓やシンバルを鳴らし、ときにダタルを回しながらの祈祷である。その間にもラスクは右回りにゆっくり回り続けているが、それが完全に静止するまでの数分以上の間、このフォリオ 8b ~ 12a の関連箇所が唱えられる。

そしていよいよ、ラが無事に戻ってきたかどうかの診断となる。もし、ラスクの羊頭がクライアントの方向を向いて静止すると、ラがしっかり「戻ってきた」(log) とみなされる。もし、対面に座っている祈祷僧のほうに向いて静止したとすると、それは「まずまずである」と判断され、一応の成功と診断される。もし全く違った方向、つまりはクライアントと祈祷僧の両者から見て、真横を向いた



写真 8 ダタルで木碗を回す
(2013 年 5 月 8 日 筆者撮影)

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

場合は、未だに十分戻ってきていないことをあらわしているという。その場合、もう一度ラスクは回転させられ、読経が再び始まる。もし、三回ともラスクを回して結果が芳しくないようなら、儀軌そのものを最初からもう一度やり直すことになっている。ただ、筆者が観察する限りは、そのようなことはめったにないように思われた。ラスクが完全に止まったように見えても、(「ミルクの湖」の湖面はとても滑らかであるため)実は微かに旋回していることが多く、祈祷僧はどちらかの方向に向くのをじっと待つことも少なくなかった²⁰⁾。

いずれにせよラスクがしかるべき方向に向いて静止したと僧が判断するや、ダタルにくくりつけてあるトルコ石に真言を吹きかけ、それをそっとラスクの入っている木椀に入れる。トルコ石はこの瞬間からラユ＝「魂のトルコ石」(bla g. yul)になるといわれる。診断の第一段階の終了である。

⑥ 小石を取る〔診断2〕(fol. 8b ~ 12a)

この段では、先に「ミルクの湖」に沈められた白黒の小石を取り出して、ラが無事に戻ってきたかどうかを再診断する。取り出す者は二人で、そのうち一人は祈祷僧である。もう一人の選定は、やや複雑である。もしクライアントが一人で来た場合は、クライアント自身に取り出すことになる。もしクライアントが男性で女性に付き添われてきた場合には、その付き添いの女性が小石を取り出すことになる。また、クライアントが女性の場合には、付き添いが男性であれ女性であれ、クライアント自身に取り出す。つまりは小石を取り出す二者のうちひとり、できるだけ女性になるよう工夫される。

まず祈祷僧が小石を三つ取り出す。続いてもう一方が、同じく三つ取り出す。計六つ取り出されたことになるが、そのうち過半数が白石だと、ラが無事に戻ってきたことをあらわしている。この時点で、この小石取りの診断は終了である。もし白石が過半数ではない場合、僧がさらに小石を二つ取り出す。そしてもう一方も、同じく二つ取り出す。計十個のうち過半数が白石だと、戻ってきたとされる。もしこの時点で白黒が同数、もしくは黒が過半数の場合、すべて小石は再び「ミルクの湖」に入れられ、同じことが繰り返される。最大三回まで繰り返すことができるが、白石の数が過半数になった段階でラは無事に戻ってきたと診断され終了となる。筆者が観察した限りでは、この小石取りの「勝負」で躓くケース

は見られなかったが、まれに「全敗」することもあるようである。その場合でも、次のプロセスに進んでいくという。

⑦ 賽子をふる〔診断 3〕(fol. 10a ~ 12a)

この段は賽子による診断であり、最後の診断となる。賽子をふる者の選別は、上記の小石の場合と同じである。まず祈祷僧が白の賽子に真言を吹きかけ、それをふる。続いてもう一方が、黒の賽子をふる。白の目が黒より大きければ、ラが戻ってきた徴となる。同数の場合や、黒の目のほうが大きかった場合は、最大 3 回まで同じことを繰り返す。ここで全敗した場合でも、もし小石の段で白が多ければ、ラは無事もどってきたと最終判断をする。ただし仮に、小石の段でもこの賽子の段でも黒が勝った場合、原則としてもう一度儀軌をやり直す必要があるという。ただ、このあたりは個々の祈祷僧の裁量に任されているようであり、「ギャプシ」(brgya bzhi) や「パルチエーラムセー」(bar chad lam sel) と呼ばれる別種の祓いの祈祷を受けることを強く勧めつつ、ラは無事戻ってきたとクライアントには説明することが少なくないようである。

ゴンポ寺のインフォーマントたちによると、診断は次の上中下の三段階に大きく分けられるという。

上 (rab): ラスクの羊頭が真つすぐクライアントを向いて静止し、小石でも賽子の目でも白が勝った場合。ラが無事に帰ってきた徴であり、それはクライアントの身体に安定していると診断される。

中 ('bring): ラスクの羊頭はクライアントもしくは祈祷僧の方向をほぼ向いて静止したものの、小石の数もしくは賽子の目の数で、黒が白より多かった場合。ラがまずまず帰ってきたと判断されるが、ラの状態はやや不安定で、クライアントの身体に堅固に落ち着いているわけではない。しかしながら一応ラは戻ってきたとされ、ラグツェグの効果はあったとみなされる。

下 (mtha'): ラスクの羊頭はクライアントもしくは祈祷僧の方向をほぼ向いて静止したものの、小石の数と賽子の目の数の両方で、黒が白

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

より多かった場合。ラが無事にクライアントに戻ってきたとはいえず、ラグツェグの儀軌をもう一度繰り返す必要があるとされる。

⑧ 締め祈禱 (fol. 12a ~ 14b)

祈禱僧が、トルコ石とラスクの入った木碗をクライアントの左手に、ダタルと羊の大腿骨を右手に持たせる。大腿骨は、クライアントが男性の場合は「雄の右脚の大腿骨」、女性の場合は「雌の左脚の大腿骨」という決まりがある。僧は、太鼓とシンバルを鳴らしながら読経をしばらく続けるが、それを終えると、トルコ石(ラユ)に真言を吹きかけ、クライアントの首にかける。また、バターから作られたラスクは、その一部を僧が指で取り、クライアントの額につけられる。ラスクそのものはその日のうちに調理に使い、体内に取り込むようクライアントにアドバイスされる。一方、ラスクの入った木碗にその場でバター茶を入れて溶かし、そのまま飲み干すようなこともよくある。これは首に掛けられたトルコ石(ラユ)とともに、クライアントの身体にラをしっかりと馴染ませるためだという。木碗も以後、自分のバター茶の碗として常用するように言われるが、それも同じ理由からである。

また祈禱僧は、儀軌の最後の段階でクライアントに応じて説法のようなことを始めることもある。次はひとつの典型例である。クライアントであった十五歳ぐらいの女の子に、ラユをかけていたときであった。

ラユが自分自身のラ(魂)だと思わないように。たとえラユを失くしたからといって、自分のラまで消えてしまったなどとは決して思わないよう。ラユに頼りすぎて、かえってラを失ってしまったような状態になりかねない。ラユはあくまで、ラグツェグの儀式をしたということの徴にすぎないからね。一番大切なのは仏法(chos)に信心(dad pa)があること。ちゃんとした信心さえあれば、ラユがあろうとなかろうと、ラはちゃんと身体におさまって大丈夫なものなんだよ。そのことをくれぐれも忘れないように。

4.4 むすびにかえて

ヌプ・リクスムゴンボ寺のラグツェグの儀礼は、部分的な簡略化は見られるものの、複雑な儀軌のプロセスをそのまま保持している。それには様々な理由が考

えられよう。ラグツェグで名高いラサのタブチゴンパは、主流派であるゲルグ派であるうえ、流行神のタブチラモ女神を祀っているため巡礼者も多く、自然、儀礼を受けに来るクライアントも少なくない。一方、ゴンポ寺は中央チベットでは少数派となるディクン・カギュ派の末寺であり、そのラグツェグの儀礼についてはメトゴンカ県出身のチベット人を中心にごく限られた人々にしか知られておらず、儀軌のプロセスを効率化させる必要性は低いものと思われる。そのうえ、都会であるラサにずっと住んでいるタブチの僧とは対照的に、ゴンポ寺の僧は三年交替で山奥にある本寺から派遣されてくる。本寺に細々と伝わる精緻なラグツェグの儀礼（の断片）を、ラサで展開しているものであろうと容易に想像できる。実際、インフォーマントはそうのように説明していた。

前章まで触れてきたよう、ラグツェグは仏教的な儀軌というよりも、民間信仰やボン教のそれに限りなく近い。仏教を信奉するラサの人々が大概において、そのような認識なのである。羊の大腿骨（ある場合には、羊肉）を用いていることが、生命を殺め、それを供儀とする古代ボン教の儀軌の残存だとよくいわれたりする。チベット語でいうところの「マルチョー」（血の生贄）*dmar mchod* であり、そこには仏教的な価値観からすると忌み嫌うべき語感が漂っている。そのうえ、第三章でも垣間見たよう、ラ思想は否応なく、他者を不幸に陥れるブラック・マジックの世界（そして、その誘惑）を内包している。そういった一種の暗さがラグツェグの儀礼に投げかけるチベットの人々の視線のなかに宿っているのであり、それがゆえに否認しても否認しきれないラグツェグに対する信仰が、人々の心のどこかにある。ラグツェグとはいわば、収まりの悪い異形な儀礼なのであり、にもかかわらず（もしくは、それがゆえに）チベットの人々の生活の身近に存在しているのである。

ラグツェグに関する他の報告と比較しながら精緻な議論をし、チベットの宗教文化におけるこの儀軌の位置づけについて人類学的なテーゼを提示するのは、次の機会に譲ろうと思う。本稿は、そのための重要な準備のひとつとしたい。

以下、テキストに関する記述である。

5 テキストについて

ヌブ・リクスムゴンボ寺で筆者が蒐集したラグツェグの筆写祈祷書は、その内容から、Samten Karmay がその論考で触れている（1998: 335–337）ペマリンパ（1450–1521）著のニンマ派版のラグツェグ（Slob dpon padma 'byung nas (sic) kyis mdzad pa'i bla bslu tshe 'gugs)²¹⁾ のヴァリエントのひとつだと思われる。同著者で別名のラグツェグの祈祷書（Slob dpon padma 'byung gnas kyis mdzad pa'i bla bslu 'chi bdag tshogs bzlog gshin 'je'i g.yul las rgyal ba'i ral gri）を筆者はラサで入手したが（以下、プリント版と略す）、その内容と Karmay の解説から判断すると、上記二つは同一もしくは極めて類似したものであると考えられる。このプリント版がゴンボ寺の筆写版の底本になったと考えられ、事実、重複する箇所が多くあった。しかし、プリント版にはない部分、筆写版オリジナルの箇所が少なからずあり²²⁾、筆写した者の（宗派・地域の）独自性が窺える。筆写版には個性的なそのタイトルも含め、綴りが誤っていると思われる箇所も多々あり、それらはプリント版のテキストの対応箇所を見ながら判読を試みた。また、ゴンボ寺の僧侶たちにも、テキストの不明瞭な箇所を尋ねて確認した。

この筆写版のテキストの大部分は、経典・聖典を筆写するときに頻用される字体「ペーツック」（dpe tshugs）で書き写されている。祈祷部分は基本的にこの字体であるが、儀軌のマニュアル部分は、挿入された「メタ・テキスト」であることを示すためであろう、草書体（'khyug yig）で書かれている。木版から印刷される一般のチベット語の経典ならば、活字そのものの大きさを二種に分け、テキストとメタ・テキストを分けることがあるが、本筆写版は書き写しであるためか字体で区別している。

6 テキストの転写

- 本テキストの転写方式は、日本及び世界のチベット学で広範に利用されているワイリー表記（Wylie）に準ずる。草書体で書かれた箇所はすべてイタリック体にした。また、短縮形（bsdus yig）はすべて開いて復元させ、元の基本形で表わした。

- テキストの単語がチベット語の正書法に矛盾している場合や、プリント版と異なる場合は、その都度脚注で正字を提示し、それに沿って訳出するよう試みた。

(1a) bla bslu'i tshe 'gugs zhag 'khrol²³⁾ dang bcas pa 'di yang mnga' bdag myang lugs kyi gter ma bzhugs so

(1b) slob dpon pad+ma'i sku la phyag 'tshal lo/ bla bslu'i mdos kyi sogs la mkhar thabs kyi stengs du/ mi nag zhags pa 'dzin pa/ g.yas na bya nag g.yon khyi nag khrid pa/ de'i phyogs bzhir mi nag zhags pa thogs pa bzhi/ khyi nag dang bya nag bzhi/ mdun du yon bdag gi glud/ shwa ba lug 'brong ra gang yang zhog/ sde brgyad shos bu dang sman sna rnams blugs/ 'gyangs 'tshams²⁴⁾ na gzhi dkar nag gnyis kyi steng du dkar po nas bre gang gi steng du ngar mi dkar po'i drung du lha shos²⁵⁾ 'brang²⁶⁾ brgyas shol rdel du dkar po drug/ sran bre gang gi steng mi nan²⁷⁾ bdud shos²⁸⁾ sho nag rdel nag drug/ bla gzugs mtsho nang du blugs/ blu²⁹⁾ g.yu

(2a) tshe dar la 'don/ bla glud khyer ba ni 'di skad do/ kyai/ yul ni bla yul ljang ri na/ bdud mkhar nag po dce³⁰⁾ dgu'i nang/ bdud kyi gtso bo chen po ste/ sku mdog nag po mun pa'i mdog/ skye 'gro'i srog bdag de na bzhugs/ srog bdag dung gi thor btsugs³¹⁾ can/ phyag na bla 'dzin zhags pa bsnams/ bla bya nag po klad la lding/ bla khyi nag po rol du khrid/ yon bdag srog gi glud cig khyed la 'bul/ dga' ba'i dam tshig gnyen po³²⁾ can/ sha khrag glud cig khyed la 'bul/ mdos glud gtsang ma 'di bzhes la/ bla tshe nyams³³⁾ pa tshur kug cig/ bla yi bdud du ma

(2b) 'bebs cig/ bzung ba thong la bcings pa khrol/ snan³⁴⁾ pa khyog la sdams³⁵⁾ pa lhod/ bdud zhal rgyur³⁶⁾ la bdud zhags pa chod/ kyai/ yul ni bla yul shar phyogs na/ bla bdud dkar po chen bo ni/ phag na bla 'dzin zhags pa bsnams/ bla bya dkar po klad la lding/ bla khyi dkar po rol du khrid/ dbang po sna lnga'i glud cig khyed la 'bul/ mdos glud gtsang ma 'di bzhes la/ bla tshe nyams³⁷⁾ pa tshur khug cig/ bla yi bdud du ma 'bebs cig/ bzung ba mthong³⁸⁾ la bcings pa khrol/ snan³⁹⁾ pa khyog la sdams⁴⁰⁾ pa lhod/ bdud zhal rgyur⁴¹⁾

la bdud zhags pa khrol/ kyai/ yul ni bla yul lho phyogs na/ bla bdud

(3a) ser po chen po ni/ phyag na bla 'dzin= bla bya ser po= bla khyi ser po= yan lag⁴²⁾
lbags pa'i= mdos glud= bla tshe= bla yi bdud= bzung ba= gnan⁴³⁾ pa= gshin po'i khrim⁴⁴⁾
sna 'phrul 'khor bzlog/ kyai/ yul ni bla yul nub phyogs na/ dam sri dmar po na bun gdon
kha can⁴⁵⁾/ phyag na (bla)⁴⁶⁾ 'dzin= bla bya dmar po= bla khyi dmar po= dca⁴⁷⁾ rus rgyus
pa'i= mdos glud= bla tshe= bla yi bdud= bzung ba= gnan⁴⁸⁾ pa= btsan sna bsgyur la btsan
zhags khrol⁴⁹⁾/ kyai/ yul ni bla yul byang phyogs na/ rgya⁵⁰⁾

(3b) byin nag po dung gi thor btsugs⁵¹⁾ can/ phyag na= bla bya nag po= bla khyi nag po=
rkang dang ba spu'i glud cig= mdos glud= bla tshe= bla yi bdud= gzung ba= gnan⁵²⁾ pa=
bdud zhal= kyai/ lha klu btsan bdud ma mo dang/ gshin po'i rgyal srin pho mos sogs/ yul
pyongs kun gyi srog bdag rnams/ gsal byed mkhris pa nang khrol bzo⁵³⁾/ nang khrol glud
gcig= mdos glud= bla tshe= bla yi= bzung ba= gnan⁵⁴⁾ pa= lha yi lag nas bla bslu'o/ btsan
gyi lag nas= ma mo'i= rgyal po'i= bdud kyi= klu'i lag= yul 'dre'i= yang

(4a) bdud bcum⁵⁵⁾ lag= bla tshe nyams pa tshur la chud/ bla yi bdud du ma= bzung ba
thong= gnan⁵⁶⁾ pa= glud 'di khyor la da song cig/ 'khor 'dir gnod pa ma byed cig/ *ces de
nas zhag khrol ba ni/ byad thag sngo dmar yon bdag re'i*⁵⁷⁾ *lus la btags/ sne mdud*⁵⁸⁾ *la
brtags*⁵⁹⁾ 'di khrol bzhin pas 'di skad do/ hUm/ dkon mchog bden pa'i byin brlabs dang/
ma dang mkha' 'gro'i bden stobs dang/ chos skyong bsrung ma'i mthu rtsal dang/ dam
can bsrung ma'i nus mthu yi⁶⁰⁾/ rgyu sbyor yon gyi bdag po la/ lha zhag⁶¹⁾ dkar po brgyab
pa 'di/ zhags pa khrol lo zhag⁶²⁾ pa chod/ lha zhags dkar po da

(4b) khrol lo/ thugs rje dgongs la khrol lo/ bdud zhags nag po brgyab pa 'di/ zhags pa
gcod dam zhags pa khrol/ bdud zhags nag po da khrol cig/ btsan zhags dmar po= zhags
pa gcod dam= de bas btsan zhags dmar po khrol/ klu zhags sngon po brgyab pa 'di/ klu
yi⁶³⁾ bcings pa'i zhags pa khrol/ zhags pa gcod dam= sa bdag bcings= rgyal zhags ser po
brgyab pa 'di/ zhags pa gcod dam= rgyal pos bcings= ma mo'i zhags= zhags pa gcod
dam= ma mos bcings= sman mos⁶⁴⁾ zhags= zhags pa gcod dam= sman mos⁶⁵⁾ rgyal srin

zhags pa rgyab= zhags pa= rgyal

(5a) srin bcings= sa bdag zhags pa= zhags pa gcod dam= sa bdag bcings= 'chi bdag bcings pa da khrol cig/ gnyen gyi⁶⁶⁾ bcings= nad kyi⁶⁷⁾ bcings= bzung ba yod na da thong cig/ phung pos bcings pa da khrol cig/ snyings bcings= khram la btab= 'khor bas bcings= las ngan rkyen gyis bstams⁶⁸⁾ pa da khrol lo/ zhags pas bcings pa da khrol cig/ *ces zhags pa bukrol⁶⁹⁾ bcad nas mdon⁷⁰⁾ gyi nang du bcug kha phyir brtan/* ma bdud lag nas bla bslu'o/ 'dre ngan lag nas= zhags pa bcings pa khrol srin gyi/ bla tshe

(5b) 'khyams pa 'dir byon cig/ mi dang bla gnyis 'grogs pa yin/ bla 'di brten la bzhugs lo/ rgyu skar gnam la shar ba bzhin/ bla tshe gnyen⁷¹⁾ po brgyas par shog/ sa la 'bras⁷²⁾ drug smin pa ltar/ bla tshe de ni 'phel bar shog/ bla tshe srog gi dkyil du stim/ tshe dang bsod nams rgyas par shog/ kyai/ de ring rgyu sbyor yon bdag gi/ sku glud mdos chen dam pa 'di/ lha srin sde brgyad tshogs la 'bul/ lan chags bu lon 'khor gryur gyi⁷³⁾ / sde brgyad lag na bla song na/ bla tshe nyams pa tshur la thong/ rgyal srin lag nas bla bslu'o/ sman gyi lag= sngar 'dre rnying pa'i= da 'dre so ma'i=

(6a) srid pa'i 'dre dgu'i= yul 'dre 'khyams po'i= the⁷⁴⁾ rang ri'u⁷⁵⁾ lan⁷⁶⁾ nas= mo 'dre srin mo'i= yon bdag glud 'di khyer la da song cig/ mgu bar gyis la rang rang gnas su dngos⁷⁷⁾ / *ces mdos lam gsum mdor skyal de nas mda' dar dang sngo thag⁷⁸⁾ 'di'i skabs su bla skad bya'o/* shar phyogs dri za'i lag nas bla bslu'o/ lho phyogs gshin rje'i= nub phyogs klu gdon= byang phyogs gnod sbyin= mtshams bzhi sde brgyad=⁷⁹⁾ *ces kham⁸⁰⁾ dang lo rtags ming 'di zhes bla bslu'o zhes tshar gsum re bya'o/ de nas bla 'gu⁸¹⁾ gyer ba ni/* hUM/ dbus phyogs zla gam dmar po dbang gi

(6b) zhal⁸²⁾ yas nas/ dpa' bo rta mchog rgyal po la/ yum mchog rdo rje⁸³⁾ phag mo ni/ phyag na tshe'i bum pa nams⁸⁴⁾ / thun mong gnas 'dir sku skyod la⁸⁵⁾ bla tshe 'gugs pa'i 'phrin las mdzod/ dpa' bo yab yum dbu stengs nas/ bcom ldan mgon po tshe dpag med/ de yi yum chen dbyings phyugs⁸⁶⁾ ma/ phyag na tshe yi bum pa snams⁸⁷⁾ / 'gro drug gnas nas tshe khug ma/ bla dang tshe 'di da tshur khug/ hUM/ shar gyi phyogs nas tshe 'gug

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

la⁸⁸⁾/ rdo rje mkha' 'gro dpa' mo ging/ dkar mo 'gyogs ma tshe bum 'dzin/ thugs kyi sprul
pa DA kwi dkar mo 'bum/ bla tshe nyams pa 'gugs pa'i 'phrin las mdzod/ hUM/ lho yi
phyogs nas

(7a) tshe 'gugs ma/ rin chen mkha' 'gro dpa' mo ging/ ser mo 'gyogs ma tshe bum 'dzin/
yon tan sprul pa DAKi ser mo 'bum/ bla tshe nyams pa 'gugs pa'i 'phrin las mdzod/
hUM/ nub kyi phyogs nas tshe 'gugs ma/ pad+ma mkha' 'gro dpa' mo ging/ dmar mo
'gyogs ma tshe bum 'dzin/ gsung gi sprul pa DAKi dmar mo 'bum/ bla tshe nyams pa
'gugs pa 'phrin las mdzod/ hUM/ byang gi phyogs nas tshe 'gugs ma/ las kyi mkha' 'gro
dpa' mo ging/ sngon po 'gyogs ma tshe bum 'dzin/ 'phrin las sprul pa DAKi ljang mo
'bum/ bla tshe nyams pa 'gugs pa'i 'phrin las

(7b) mdzod/ hUM/ ye shes dbyings nas tshe 'gugs ma/ bde gshegs sangs rgyas mkha'
'gro ma/ dmar me tshe yi bum pa 'dzin/ chos kyi dbyings nas tshe grengs⁸⁹⁾ las/ nam
mkha'i kham nas bla bslu'o/ hUM/ sangs rgyas mkha' 'gro gshin rje mo/ sngon po tshe
yi bum pa snams⁹⁰⁾/ nam mkha'i kham nas tshe drengs⁹¹⁾ la/ rlung gi kham nas bla
bslu'o/ hUM/ rdo rje mkha' 'gro skyong byed ma/ mthing kha tshe yi bum pa 'dzin/ rlung
gi kham nas tshe drengs⁹²⁾ la/ me yi kham nas bla bslu'o/ hUM/ rin chen mkha' 'gro
krag⁹³⁾ byed ma/ ser mo tshe yi bum pa snams⁹⁴⁾/ me'i kham nas tshe drengs⁹⁵⁾ la/ chu yi
kham nas bla bslu'o/ hUM/ pad+ma mkha' 'gro rmongs byed ma/ dmar mo tshe yi bum
pa

(8a) bsname/ chu yi kham nas tshe drengs⁹⁶⁾ la/ sa yi kham nas bla bslu'o/ hUM/ las
kyi mkha' 'gro gtum drags⁹⁷⁾ can/ ljang mo tshe yi bum pa snams⁹⁸⁾/ sa yi kham nas tshe
drengs⁹⁹⁾ la/ 'byung po'i lag nas bla bslu'o/ *de nas dur khrod brgyad*¹⁰⁰⁾ *kyi mkhro' bskul*
ba/ hUM/ dur khrod brgyad nas bla 'gugs ma/ shar phyogs gtums drag¹⁰¹⁾ dur khrod nas/
rdo rje mkha' 'gro sku mdog dkar/ phyag na tshe mda' dkar po snams¹⁰²⁾/ shar phyogs dri
za'i lag nas bla bslu'o/ lho phyogs gad brgyangs¹⁰³⁾ sgrogs pa'i dur khrod nas/ rin chen
mkha' 'gro sku mdog ser/ phyag na tshe yi mda' dar ser po snams¹⁰⁴⁾/ lho phyogs gshin
rje'i/

(8b) lag nas bla= nub phyogs pad+ma 'khyil ba'i dur khrod nas/ pad+ma mkha' 'gro sku mdog dmar/ phyag na tshe yi mda' dar dmar po snams¹⁰⁵⁾/ nub phyogs chu bdag lag nas bla bslu'o/ byang phyogs ki la ya yi dur khrod nas/ las kyi mkha' 'gro sku mdog ljang/ phyag na tshe yi mda' dar ljang khu snams¹⁰⁶⁾/ byang phyogs gnod sbyin lag nas bla bslu'o/ *de nas bla rdel mtsho la bskur/ bla gzugs ma byi bar mtsho thog tu bzhag 'gugs bzhugs byas nas/ hUM/* bla ma yi dam dkon chog gsum/ do nub mgon dang skyabs mdzod cig/ mar las byung ba'i bla gzugs 'di/ bcom ldan mgon po tshe dpag med/

(9a) rgyu sbyor yon gyi bdag po yi/ bla dang tshe ni myur du khugs/ lha yi lag nas bla bslu'o/ klu'i= bdud kyi= gnod sbyin= gshin rje'i= rgyal po'i= ma mo'i= the'u rang= yul 'dre'i= 'dre mo'i= rgyal mgong¹⁰⁷⁾ =¹⁰⁸⁾ 'di rma¹⁰⁹⁾ khug ring 'dabs pa yin/ bla dang tshe ni myur du khug/ bla dang tshe ni khug gyur na/ bla g.yu 'od dang ldan gyur cig/ bla dar krag¹¹⁰⁾ dang ldan gyur cig/ mda' dar 'od dang ldan gyur cig/ nas kyi bre las phul mang shog/ bla rdel dkar po phyag na shog/ lha sho dkar po che gyur cig/ bla gzugs

(9b) gnyen¹¹¹⁾ po mdun de ston/ rab ni yon bdag 'di la ston/ 'bring ni gnas sbyor bdag la ston/ tha ma bla khyim yul du ston/ kyai/ bla dang tshe ni ma khugs na/ bla g.yu 'od dang mi ldan shog/ bla dar krag¹¹²⁾ dang mi lden shog/ mda' mo mdangs dang mi lden shog/ nas ni bre las phul nyung shog/ bdud rdel nag po lag tu shog/ 'dre sho nag po che bar shog/ bla gzugs nyen¹¹³⁾ po rgyab de ston/ za 'dre'i lag nas bla bslu'o/ gshed de lag nas= srog gcod= dbugs len= 'khyor 'dre'i= bdud bcod= sen bdud¹¹⁴⁾ =

(10a) gshin lcags=¹¹⁵⁾ 'di nas bla gzugs bskor rdel dkar nag snyabs¹¹⁶⁾ ste/ *de nas mtshams bzhi'i mkha' 'gro bskul ba ni/ hUM/* shar lho gtum drag dur khrod nas/ dam tshig mkha' 'gro drag shul can/ dkar mo 'gyogs byed pho nya ma/ phyag na lcags kyu 'bar ba bsname/ me lha'i lag nas tshe drengs¹¹⁷⁾ la/ drang srong lag nas bla bslu'o/ hUM/ lho nub gtum po'i dur khrod nas/ sna tshogs mkha' 'gro btul shugs can/ ser mo khyog¹¹⁸⁾ byed las mkhan ma/ phyag na zhags pa 'bar ba bsname/ srin po'i lag nas tshe drengs¹¹⁹⁾ la/ 'byung po'i lag nas bla bslu'o/

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

(10b) hUM/ nub byang rab 'jigs dur khrod nas/ thams cad mkha' 'gro drag gtum can/
dmar mo 'gyogs¹²⁰⁾ byed las mkhan ma/ phyag nas¹²¹⁾ lcags sgrog 'bar ba bsnams/ rlung
lha'i lag= rig 'dzin lag= hUM/ byang shar ha ha sgrog pa'i dur khrod nas/ rig 'dzin mkha'
'gro rdzu 'phrul can/ ljang mo gtum byed las mkhan ma/ phyag na dril bu 'bar ba bsnams/
dbang ldan lag= sa bdag klu gnyen lag= bla dang tshe 'di myur du khugs/ *ces sho dkar po*
*mi bla dor tsam gyi lag tu mtsho thon*¹²²⁾ *nas so pra dang bcas rgyag bzhin bas 'di skyad*
do/ kyai/ 'byung ba lnga'i khrod nas/ 'ja' mtshon gur

(11a) phub kyi li li/ chos nyid stong gsal ya la la/ lha yi rol mo di ri ri/ lhan cig skyes pa'i
pho lha ni/ sku la dar dkar na bza' gsol/ phyag na mda' dar tshe bum bsnams/ dkar po dge
ba'i gdong grogs mdzod/ khyod lhan cig skyes pa'i lha yin sde/ lha yang bdud du ma
'bebs cig/ yon bdag bla tshe lhas skyob cig/ tshe yi ston¹²³⁾ phur ma bud cig/ bla khyim¹²⁴⁾
'dre la ma bskur cig/ nyin mtshan med par lhas skyob cig/ hUM/ bla ma yi dam zu¹²⁵⁾
dang dpang/ ma rgyud mkha' 'gro zu¹²⁶⁾ dang dpang/ chos

(11b) skyong srung ma zu¹²⁷⁾ dang dpang/ dam can rgyal po= yul lha gzhi bdag= de ring
zu¹²⁸⁾ dang dpang mdzod cig/ bla dang tshe ni khug gyur cig¹²⁹⁾/ lha sho dkar po tshe¹³⁰⁾
gyur cig/ *ces sho lan gsum yan mi rgyag/ bla rdel dkar nag lan gsum yan mi bya/ de nas*
*bud med cig gi sho zhag*¹³¹⁾ *zung nas 'di skad do/ kyai/ mun nag theb klong dkyil nas/*
srog bdag nag po dar thod can/ skye 'gro yongs kyi srog dbugs len/ khyod ni lhan cig
skyes pa'i 'dre yin na/ lag na rdel nag sho nag sgril lo/ bla dang tshe ni ma khug na/ 'dre
*sho nag po che gyur cig/ shes yang shol*¹³²⁾ *rdel lag tu bslangs/ dkar po yod pa*

(12a) *dang/ lha sho che ba dang bla gzugs ston pa dang de ltar 'grig na bzang zhing gal*
che lags/ de nas sgo ba bzhi'i skul te/ hUM/ shar gyi phyongs nas tshe 'gugs ma/ kha
gdong dkar mo snying rje'i lchags kyu bsnams/ a 'gu sha dzas tshe drongs la/ shing gi
*kham nas bla bslu'o/ bla tshe gnyen*¹³³⁾ *po lus la stim/ hUM/ lho yi phyogs nas tshe=*
*phrag dong*¹³⁴⁾ *ser mo byams pa'i zhags pa= spa sha hri yi tshe= me'i kham nas= bla tshe*
*gnyen*¹³⁵⁾ *po= hUM/ nub kyi phyogs nas tshe= khyi gdong dmar mo dga' ba'i lcags*
*sgrongs*¹³⁶⁾ *= pho Ta bam kyi tshe= lcags kyi kham=*

(12b) bla tshe gnyen¹³⁷⁾ po= hUM/ byang gi phyogs nas tshe= 'ug gdong ljang mo rtags nyoms¹³⁸⁾ dril bu 'dzin/ a be sha yi tshe drongs la/ chu yi khams= bla tshe gnyen¹³⁹⁾ po= hUM/ steng gi phyogs nas tshe= sing¹⁴⁰⁾ gdong mthing kha gri gug bsnams/ yid shes thugs rje tshe= steng phyogs nam kha'i lag= bla tshe gnyen¹⁴¹⁾ po lus= hUM/ 'og gi phyogs nas= stag gdong nag mo khur bu= 'khor ba'i skye sgo bcod¹⁴²⁾ mdzad ma/ 'og gi phyogs nas tshe drongs= sa bdag lag= bla tshe gnyen¹⁴³⁾ po lus la stim/ *ces de nas bla gzugs yon bdag la ster zhing 'di skad do/* hUM/ 'bru bcu snying po bsdu pa'i bla gzugs 'di/

(13a) bla dang tshe yi sten¹⁴⁴⁾ du byas/ sngags dang phyag rgyas byin gyis brlabs/ bkra shis tshe brtan dpal gyis zas/ 'di bzos bla gzugs gnas su thim/ rde'i tshe 'dzug¹⁴⁵⁾ brten du 'jug/ om a bA ra mi ta a yur dzA na hri rta dz+haM b+h+raM swa hA/ *de nas bla tshe brgyas 'debs¹⁴⁶⁾ pa ni mda¹⁴⁷⁾ dar bla g.yu lag tu btad la/* hUM/ dbus nas bkra shis tshe yi lha/ rnam par gnang¹⁴⁸⁾ mdzad tshe dpag med/ tshe brten¹⁴⁹⁾ 'di la rab brten¹⁵⁰⁾ nas/ tshe gzugs gnas su thim par mdzod/ 'chi med tshe yi dngos grub scol¹⁵¹⁾/ shar nas rdo rje tshe dpag med/ tshe brten¹⁵²⁾ 'di la rab

(13b) brten¹⁵³⁾ nas/ tshe gzugs 'di la thim par mdzod/ 'chi med tshe yi dngos grub scol¹⁵⁴⁾ / lho nas rin chen tshe dpag med/ tshe brten¹⁵⁵⁾ 'di la= tshe gzugs 'di la= 'chi med tshe= nub nas gnang¹⁵⁶⁾ mtha' tshe dpag med/ tshe brten¹⁵⁷⁾ = tshe gzugs= 'chi med= byang nas don grub tshe dpag med/ tshe brten¹⁵⁸⁾ = tshe gzugs= 'chi med= hUM/ nam kha'i khams nas tshe 'dzin ma/ sangs rgyas yum chen mkha' 'gro ma/ 'khor lo 'bar ba'i rgyas thobs¹⁵⁹⁾ cig/ tshe 'di bcol lo srog 'di sdams¹⁶⁰⁾/ 'chang ba 'di la bsrung du bcol¹⁶¹⁾/ shar gyi phyogs nas tshe

(14a) 'dzin ma/ rdo rje rigs kyi mkha' 'gro ma/ rdo rje 'bar ba¹⁶²⁾ rgyas thob cig/ tshe 'di bcol lo srog 'di sdams¹⁶³⁾/ 'chang ba 'di la bsrung du gsol/ lho yi phyogs nas tshe 'dzin ma/ rin chen rigs kyi mkha' 'gro ma/ rin chen 'bar bas rgyas thob cig/ tshe 'di= 'chang ba 'di la= nub kyi phyogs nas= pad+ma rigs kyi= pad+ma 'bar bas= tshe 'di= 'chang ba 'di la= byang gi phyogs nas= las kyi rigs kyi= rgya gram 'bar bas= tshe 'di= 'chang ba 'di=

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

rak+Sha rak+Sha hUM phaTA/ rdo rje tshe yi bkra shis shog/ rin chen tshe yi bkra shis shog/

(14b) pad ma tshe yi bkra shis shog/ dkar mo tshe yi bkra shis shog/ lha mo bzhi yi bkra shis shog/ mi 'gyur blaum¹⁶⁴) srog dang rgyas thob cig sras bcas brjod/ gzhan yang bkra shis sngo smon sogs kyi kyang 'sess¹⁶⁵) bdag 'dra pad ma 'byung gnas ngas/ kyai/ yon bdag tshe yi dngos grub rnyed/ bskal pa snyigs ma'i dus 'dis/ 'gro ba'i don du dgongs pa btang/ mkhar

(15a) tshon gzar¹⁶⁶) ma bod la gnan/ de nas rin chen gter du sbas/ 'gro ba'i tshe srog bslu ba'i skal ldan gcig dang phrad par shog/ sa ma ya/ rgya/ rgya/ rgya/ gter rgyan slob dpon pad mas mdzad pa'i bla bslu'i cho ga bdudo¹⁶⁷) gter mdzad rdzogs so/

7 訳注

- 原文テキストの草書体の部分（転写の斜体の箇所）は、訳文では下線を引いた。
- 訳中の（ ）内は筆者の挿入によるものである。
- 原文テキストでは「悪霊」に相当する類義語が数多く存在したため、以下のように識別して訳出した。（カタカナ語は最初に出てきた段階で、脚注で解説するようにした。） bdud → 魔, srog bdag → ソダ, dam sri → ダムシ, btsan → ツェン, rgyal po → ゲルポ, ma mo → マモ, srin / srin po → 羅刹, ma bdud → 魔女, 'dre → 霊, 神霊, 魔, 'dre mo / mo 'dre → 妖女
- 「魂」に相当する類義語に関しては、以下のように識別した。 bla → ラ（もしくは、魂）, srog → 命, tshe → ツェ, dbugs → 生氣

(1a) ラを取り戻し、ツェを召喚する、縄を解くものであると同時に、君主ニヤン¹⁶⁸)の系譜の埋蔵経

(1b) 阿闍梨パドマサンバヴァに拝礼致します／ ラル¹⁶⁹⁾ の下などであるが、砦の上に／ 黒ヒトが縄を持ち／ 右側には黒鳥、左側には黒犬を引き／ その(砦の) 四方向に、黒ヒトが縄を持っているのを四体／ 黒犬四体と黒鳥四体／ 前には施主の身代わり／ (そして、) 鹿、羊、ヤク、ヤギをできるだけ多く置き／ 八部衆のショブ¹⁷⁰⁾ と様々な葉などを入れる／ より適切にするならば、白と黒の土台、その二つの上に、白のほうには大麦をデー¹⁷¹⁾ いっぱいに、その上に白インガルミ¹⁷²⁾、その前に神の賽子を、その近くに、それに加えて、小石として白いのを六つ／ 豆をデーいっぱいの上に、黒ヒト、魔のショブ、黒の賽子、黒の小石六つ／ ラスク¹⁷³⁾ を湖の中に入れ／ ラユ¹⁷⁴⁾ を

(2a) ツェタル¹⁷⁵⁾ の矢に付け／ ラの身代わりを(魔のもとへと) 運ぶには、このように言う／ ケー！／ ところはラのところ、緑の山に／ 魔の黒い砦で、九つの尖がりがあるものの中に／ 魔の大なる主は／ 体の色が黒で暗黒の色／ 生きとし生ける者のソダ¹⁷⁶⁾ はここにおわす／ ソダは法螺貝の頭飾りを持つ者で／ 手にはラを握り、縄を振り回し／ ラの黒鳥が上を旋回し／ ラの黒犬を辺りで引く／ 施主の命の身代わり(ル)をお前に捧げる／ 快楽的で凶悪な誓いを持つ者よ／ 肉と血の代わりをお前に捧げる／ この清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ

(2b) 降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 魔の顔が変わり、魔の縄が切れる／ ケー！／ ところはラのところ、東方に／ ラの大白魔というのが／ 手にはラを握り、縄を振り回し／ ラの白鳥が上を旋回し／ ラの白犬を辺りで引く／ 五器官¹⁷⁷⁾ の代わりをお前に捧げる／ この清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 魔の顔が変わり、魔の縄が緩む／ ケー！／ ところはラのところ、南方に／ ラの

(3a) 大黃魔というのが／ 手にはラを握り、縄を振り回し／ ラの黄鳥が上を旋回し／ ラの黄犬を辺りで引く／ 施主の皮膚の代わりをお前に捧げる／ こ

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

の清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 一万もの様々な死人の魔術を撥ね返す／ ケー！／ ところはラのところ、西方に／ 赤のダムシ¹⁷⁸⁾、霧の悪霊が／ 手にはラを握り、縄を振り回し／ ラの赤鳥が上を旋回し／ ラの赤犬を辺りで引く／ 施主の骨と筋肉の代わりをお前に捧げる／ この清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 様々なツェン¹⁷⁹⁾を変化させ、ツェンの縄が緩まる／ ケー！／ ところはラのところ、北方に／

(3b) 黒帝釈天、法螺貝の頭飾りをもつ者が／ 手にはラを握り、縄を振り回し／ ラの黒鳥が上を旋回し／ ラの黒犬を辺りで引く／ 足と毛の代わりをお前に捧げる／ この清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 魔の顔が変わり、魔の縄が切れる¹⁸⁰⁾／ ケー！／ 俗神¹⁸¹⁾と龍神とツェンと魔とマモと／ 死のゲルボ¹⁸²⁾や男女の羅刹など／ あらゆる土地のソダ¹⁸³⁾たちは／ (上に)詳しく挙げ説明したティーバ(熱)、そして内臓を食べよ／ 内臓の代わりをお前に捧げる／ この清浄なドトルをお受け取りなさい／ 弱ったラとツェをこっちに戻せ／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ 俗神の手からラを取り戻すぞ／ ツェンの手からラを取り戻すぞ／ マモの手からラを取り戻すぞ／ ゲルボの手からラを取り戻すぞ／ 魔の手からラを取り戻すぞ／ 龍神の手からラを取り戻すぞ／ 土地霊の手からラを取り戻すぞ／ そして

(4a) 十の魔の手からラを取り戻すぞ／ 弱ったラとツェをこっちに入れる／ 数多のラの魔よ、降りて来い／ 掴んでいたものを放し、結びをほどけ／ 呪いを解いて、縛りを緩めよ／ この身代わりをお前にいま送ったぞ／ このあたりで危害を与えるな／ と、それから「縄をほどく」(段階)であるが／ 紫の呪

いのロープをその施主の身体に付けて／（もう一方の）端を魔に付けて、これを解くようにこのように言う／ フム！／ 三宝¹⁸⁴⁾ という真正の加持の力と／ 母とダーキニーの真理の力と／ チョキョン護法神の御力と／ ダムチェン護法神の御力でもって／ 施主に対して／ 俗神の白縄を結びつけたのを／ 縄を解いて、縄を切って／ 俗神の白縄を今

(4b) 解いてください／ 慈悲をお考えになり、解いてください／ 魔の黒縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ 魔の黒縄を今、解け／ ツェンの赤縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ こうしてツェンの赤縄を解く／ 龍神の青縄を結びつけたのを／ 龍神の締めた縄を解く／ 縄を切って、縄を解いて／ 土地神の締めた縄を解く／ ゲルボの黄縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ ゲルボの締めた黄縄を解く／ マモの縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ マモの締めた縄を解く／ メンモ¹⁸⁵⁾ の縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ メンモとゲルボと羅刹が縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ ゲルボと

(5a) 羅刹の締めた縄を解く／ 土地神の縄を結びつけたのを／ 縄を切って、縄を解いて／ 土地神の締めた縄を解く／ 死の主の締めたのをいま解け／ ニエンが締めたのをいま解け／ 病の締めたのをいま解け／ 掴んでいるものがあれば、さあ捨てろ／ 死体が締めたのをいま解け／ 心の臓が締めたのをいま解け／ タムラダブ¹⁸⁶⁾ が締めたのをいま解け／ 輪廻が締めたのをいま解け／ 悪業のせいで大きくなったのをいま解放せよ／ 縄で締めたのをいま解け／ それで、縄を緩めて切り、ドの中に入れ、（それを）外側を向くように固定する／ 魔女の手からラを取り戻す／ 邪悪な霊の手からラを取り戻す／ 縄を締めたのを解け、羅刹の¹⁸⁷⁾ ラとツェが

(5b) 彷徨っているのよ、帰ってこい／ 人とラの両者は近しいもの同士である／ このラが固着し、留まりますよう／ 星々が空を昇るように／ ラとツェは互いに一緒になるよう／ 大地に六種の穀物が熟するように／ ラとツェ（の力）が増大するよう／ ラとツェが命¹⁸⁸⁾ のなかに溶け込むよう／ ツェと福德

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

が増大するよう／ ケー！／ 今日は施主の／ 身体のとドの大きくて最高のものを／ 八部衆たちに捧げる／ 縁起が積み重なって集まったため／ 八部衆の手にラが落ちているのなら／ 弱ったラとツェをこっちに渡せ／ ゲルボと羅刹の手からラを取り戻す／ メンモの手からラを取り戻す／ 昔の古い霊の手からラを取り戻す／ いま、新しい霊の手からラを取り戻す／

(6a) 九宮¹⁸⁹⁾の神霊の手からラを取り戻す／ 彷徨う土地霊の手からラを取り戻す／ 悪戯者のテプランの手からラを取り戻す／ 妖女や羅刹女の手からラを取り戻す／ この施主の身代わりを持って行って、さあ立ち去れ／ 喜んで自分のところに還れ／ それで、ドを三叉路のところに運び、それで、ダタル¹⁹⁰⁾と羊の脚の骨（を持って、）その時にラを叫ぶ¹⁹¹⁾／ 東方の乾闥婆^{けんだつば}の手からラを取り戻す／ 南方の閻魔の手からラを取り戻す／ 西方の龍神の悪霊の手からラを取り戻す／ 北方の夜叉の手からラを取り戻す／ 四つの境の方向の八部衆の手からラを取り戻す／ それで、五行（が……で、）干支（が……で、）名前（が……である）ラを取り戻す、と三回言う／ それで、ラを呼ぶ念誦であるが／ フム！／ 扇形であるウ¹⁹²⁾の、赤い絶対力である

(6b) 無限の宮殿¹⁹³⁾から／ 勇者馬頭明王と／ その最高の伴侶である金剛牝豚は／ お手に長寿の壺を持ち／ いつもの場所、そこで体を震わせて／ ラとツェを呼び戻す偉業をなさっている／ 勇者のヤプユム¹⁹⁴⁾の御頭の上から／ 勝者の護法神である無量寿仏／ その大いなるユム・インチュクマ¹⁹⁵⁾／ お手に長寿の壺を持ち／ 六道にとどまり、ツェを呼び戻す女神／ ラとツェをさあこっちに呼び戻せ／ フム！／ 東方からツェを呼び戻す女／ 金剛のダーキニー、女勇者のギン¹⁹⁶⁾／ 白い疾走の女が長寿の壺を持ち／ 意の顕現、白のダーキニー十万が／ 弱ったラとツェを呼び戻す偉業をなさっている／ フム！ 南方から

(7a) ツェを呼び戻す女／ 宝珠のダーキニー、女勇者のギン／ 黄色の疾走の女が長寿の壺を持ち／ 知恵の顕現、黄のダーキニー十万が／ 弱ったラとツェを呼び戻す偉業をなさっている／ フム！／ 西方からツェを呼び戻す女／ 蓮

のダーキニー、女勇者のギン／ 赤色の疾走の女が長寿の壺を持ち／ 口の顕現、赤のダーキニー十万が／ 弱ったラとツェを呼び戻す偉業をなさっている／ フム！／ 北方からツェを呼び戻す女／ 縁起のダーキニー、女勇者のギン／ 青色の疾走の女が長寿の壺を持ち／ 御業の顕現、緑のダーキニー十万が／ 弱ったラとツェを呼び戻す偉業を

(7b) なさっている／ フム！／ 原初智の空間からツェを呼び戻す女／ 善逝^{ぜんぜい}の仏陀のダーキニーが／ 赤色の長寿の壺を持ち／ 法界からツェを引くことにより／ 空の領域からラを取り戻す／ フム！／ 仏陀のダーキニー、閻魔の女が／ 青色の長寿の壺を持ち／ 空の領域からツェを引く／ 気の領域からラを取り戻す／ フム！／ 金剛のダーキニー、守護する女が／ 藍色の長寿の壺を持ち／ 気の領域からツェを引く／ 火の領域からラを取り戻す／ フム！／ 宝珠のダーキニー、荒ぶる女が／ 黄色の長寿の壺を持ち／ 火の領域からツェを引く／ 水の領域からラを取り戻す／ フム！／ 蓮のダーキニー、錯乱した女が／ 赤の長寿の壺を

(8a) 持ち／ 水の領域からツェと引く／ 土の領域からラを取り戻す／ フム！／ 縁起のダーキニー、狂暴なる者が／ 緑の長寿の壺を持ち／ 土の領域からツェを引く／ 五行の神の手からラを取り戻す／ それから、八大墓場のダーキニーを駆り立てるには／ フム！／ 八大墓場からラを取り戻す女／ 東方の荒々しい墓場から／ 金剛のダーキニー、白色の身体をもつ者が／ 手に白のツェのダタルを持ち／ 東方の乾闥婆の手からラを取り戻す／ 南方の狂い笑いの墓場から／ 宝珠のダーキニー、黄色の身体をもつ者が／ 手に黄のツェのダタルを持ち／ 南方の閻魔の

(8b) 手からラを取り戻す／ 西方の蓮が回り集まる墓場から／ 蓮のダーキニー、赤色の身体をもつ者が／ 手に赤のツェのダタルを持ち／ 西方の水の主の手からラを取り戻す／ 北方の金剛樞¹⁹⁷⁾の墓場から／ 縁起のダーキニー、緑色の身体をもつ者が／ 手に緑のツェのダタルを持ち／ 北方の夜叉からラを取り戻す／ それから、ラの小石を湖に投げ入れる／ ラスクが止まるまで、湖

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

の上に置いたままにしておき、待ちながらそのまま居て／ フム！／ ラマ、イ
ダム、三宝よ／ 今晚、どうかご加護ください／ バターで出来たこのラスク／
勝者の護法神である無量寿仏よ／

(9a) 施主の／ ラとツェを素早く引き戻す／ 俗神の手からラを取り戻す／
龍神の手からラを取り戻す／ 魔の手からラを取り戻す／ 夜叉の手からラを取り
戻す／ 閻魔の手からラを取り戻す／ ゲルボの手からラを取り戻す／ マモ
の手からラを取り戻す／ テプランの手からラを取り戻す／ 土地霊の手からラ
を取り戻す／ 妖女の手からラを取り戻す／ ゲルゴン¹⁹⁸⁾の手からラを取り戻
す／ これは取り戻せない間、念誦する／ ラとツェを素早く引き戻す／ ラと
ツェを取り戻すことができたのなら／ ラユが光り輝くように／ ラダル¹⁹⁹⁾が
美しく輝くように／ ダタルが光り輝くように／ デー²⁰⁰⁾の大麦よりプル²⁰¹⁾ほ
ど多くなっていますように／ ラの白石が手に来ますよう／ 神の白賽子(の
目)が多く出ますように／ 聖なるラスクが

(9b) 前を向くよう／ 「上」なら、この施主にいる方向を向くよう／ 「中」なら、
(この祈祷の)場を作っている私の方向²⁰²⁾を向くよう／²⁰³⁾ 「下」なら、(施主
の)家の方角を向くよう／ ケー！／ ラとツェが取り戻すことができなかった
のなら／ ラユが光り輝くことはないよう／ ラダルが美しく輝くことはない
よう／ ダタルの矢がいま輝くことはないよう／ 大麦がデーよりもプルほど少
なくなっているよう／ 魔の黒石が手に来ますよう／ 魔の黒賽子(の目)が多
く出ますように／ 聖なるラスクが後ろを向くよう／ サデー²⁰⁴⁾の手からラを
取り戻す／ シュー²⁰⁵⁾の手からラを取り戻す／ ソクチョ²⁰⁶⁾の手からラを取り
戻す／ ウレン²⁰⁷⁾の手からラを取り戻す／ キョルテ²⁰⁸⁾の手からラを取り戻す
／ ドウチョ²⁰⁹⁾の手からラを取り戻す／ 魔と羅刹の手からラを取り戻す／

(10a) シンチャ²¹⁰⁾の手からラを取り戻す／ それから、ラスクを回し、(湖に沈
んだ)白黒の小石を手を伸ばして取り出す／ それから四方向の間の方角にいる
ダーキニーを駆り立てるには／ フム！／ 東南の荒々しい墓場から／ 誓い
(サマヤ)のダーキニー、残忍な者／ 疾走する白い召使い女／ 手には炎で輝

く鉤を持ち／ 火の神の手からツエを引っ張る／ 仙人の手からラを取り戻す／
 フム！／ 南西の獐猛な墓場から／ 様々なダーキニー，調伏力のある者／ 疾
 走する黄色い召使い女／ 手には炎で光り輝く縄を持ち／ 羅刹の手からツエを
 引っ張る／ 五行の神の手からラを取り戻す／

(10b) フム！／ 北西の最も恐ろしい墓場から／ すべてのダーキニー，狂暴な
 者／ 疾走する赤い召使い女／ 手には炎で光り輝く鎖を持ち／ 気の神の手
 からツエを引っ張る／ 持明の手からラを取り戻す／ フム！／ 北東の大笑い
 の墓場から／ 持明のダーキニー，魔力を持つ者／ 緑の獐猛な召使い女／ 手
 には炎で光り輝く鈴を持ち／ 大自在天の手からツエを引っ張る／ 土地神，龍
 神，ニエンの手からラを取り戻す／ ラとツエを素早く呼び戻す／ と言って、
白の賽子を落とさないように、手の中で、湖の上から歯を食いしばりながら振
り、このように言う／²¹¹⁾ ケー！／ 五行の中から／ 虹のテントが

(11a) 輝きを放っている／ 本性は空であり，澄みきり光っている／ 神の楽器
 が鳴っている／ (施主が) 生まれた時から一緒にいるボラ²¹²⁾ とは／ 体に白い
 絹の衣服を着ており／ 手にダタルと長寿の壺を持っている／ 純粹かつ高德，
 そして親しみ深い／ お前は(施主が) 生まれた時からの神なのだ／ 神(ボ
 ラ) もまた，多くの魔を倒すよう／ 施主のラとツエは神(ボラ) が護るよう／
 ツエの強固な杭を取り外さぬよう／ ラを浮遊霊に渡さぬよう／ 昼夜なく神
 (ボラ) が護るよう／ フム！／ ラマ，イダムの証人よ／ 母タントラのダー
 キニーの証人よ／ 護法神の

(11b) 証人よ／ ダムチェン・ゲルボの証人よ／ 土地神の証人よ／ 今日(の
 この日)，証人になってください／ ラとツエを取り戻したならば／ 神の白賽
 子(の目)が多く出ますよう／ と，賽子を三回以内で振る／ ラの白黒の小石
を，三回を超えないように取る／ それから女が黒賽子を持ってこのように言う
／ ケー！／ 暗黒が満ちる空間の中から／ 絹の頭巾を巻いた，黒色のソダ
 が／ すべての生きとし生ける者の命とウを取る／ お前が(施主と) 一緒に生
 まれた魔であるならば／ 手に黒の小石と黒の賽子をくっつけよ／ ラとツエを

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

取り戻せていないのなら／ 魔の黒賽子が大きく出ますように／ と、もう一度
賽子と石を手にする／ 白石が(手に)あるの／

(12a) と／ 神の賽子が大きいのとラスクが明らめるのなどが適していたならば、
それは吉祥の表われであり重要である／ それからの門の四神を駆り立てるには
／ フム！／ 東方からツェを取り戻す女が／ 顔が白く、仁の鉤を持つ／ ア
グシャゼー²¹³⁾ がツェを引っ張る／ 木の領域からラを取り戻す／ ラとツェが
一緒になって体に溶け込む／ フム！／ 南方からツェを取り戻す女が／ 黄色
い豚顔で慈悲の縄を持つ／ バシャシイ²¹⁴⁾ がツェを引っ張る／ 火の領域から
ラを取り戻す／ ラとツェが一緒になって体に溶け込む／ フム！／ 西方から
ツェを取り戻す女が／ 赤い犬顔で、幸福の鎖を持つ／ ポタバムキ²¹⁵⁾ がツェ
を引っ張る／ 鉄の領域からラを取り戻す／

(12b) ラとツェが一緒になって体に溶け込む／ フム！／ 北方からツェを取り
戻す女が／ 緑の鼻顔で平等性を司る鈴を持つ／ アベシャイ²¹⁶⁾ がツェを引っ
張る／ 水の領域からラを取り戻す／ ラとツェが一緒になって体に溶け込む／
フム！／ 上方からツェを取り戻す女が／ 藍の獅子顔で、鉤状の刀を持つ／
イシ・トゥジェ²¹⁷⁾ がツェを引っ張る／ 上方の空の手からラを取り戻す／ ラ
とツェが一緒になって体に溶け込む／ フム！／ 下方からツェを取り戻す女が
／ 黒の虎顔で、背負い袋²¹⁸⁾ を持つ／ 転生への扉を断つ女／ 下方からツェ
を引っ張る／ 土地神の手からラを取り戻す／ ラとツェが一緒になって体に溶
け込む／ それからラスクを施主に与え、このように言う／ フム！／ 十種の
穀物の精が集まったこのラスクは／

(13a) ラとツェの礎となった／ 真言と印契^{いんけい}で加持を与える／ 吉祥であり、強
固なツェの、幸ある食である／ これを食べて、ラスクの場合へ溶け込む／ 小石
のツェを指の中にしっかり入れる／ オムアバーラミタアユルギャナシ／ タフ
ムドォムソハ²¹⁹⁾ それで、ラとツェに封をするには、ダタルとラユを(クラ
イエントの)手に与えて／ フム！／ 中央から吉祥の長寿の神／ 大日如来と
無量寿仏／ この長寿の礎に忠誠を尽し／ ツェの身体の場合に溶け込んで頂く／

不死と長寿の成就をゆだねる／ 東方から金剛の無量寿仏／ この長寿の礎に忠誠を

(13b) 尽し／ ツェのこの身体の上に溶け込んで頂く／ 不死と長寿の成就をゆだねる／ 南方から宝珠の無量寿仏／ この長寿の礎に忠誠を尽し／ ツェのこの身体の上に溶け込んで頂く／ 不死と長寿の成就をゆだねる／ 西方から無量光の無量寿仏／ この長寿の礎に忠誠を尽し／ ツェのこの身体の上に溶け込んで頂く／ 不死と長寿の成就をゆだねる／ 北方から成就の無量寿仏／ この長寿の礎に忠誠を尽し／ ツェのこの身体の上に溶け込んで頂く／ 不死と長寿の成就をゆだねる／ フム！／ 空の領域からツェを取り戻す女／ 仏陀の大いなるユム、ダーキニーよ／ 炎で光り輝く輪廻で、封をせよ／ このツェをゆだね、この命をつなげよ／ これを護り、加護頂くよう祈ります／ 東方からツェを

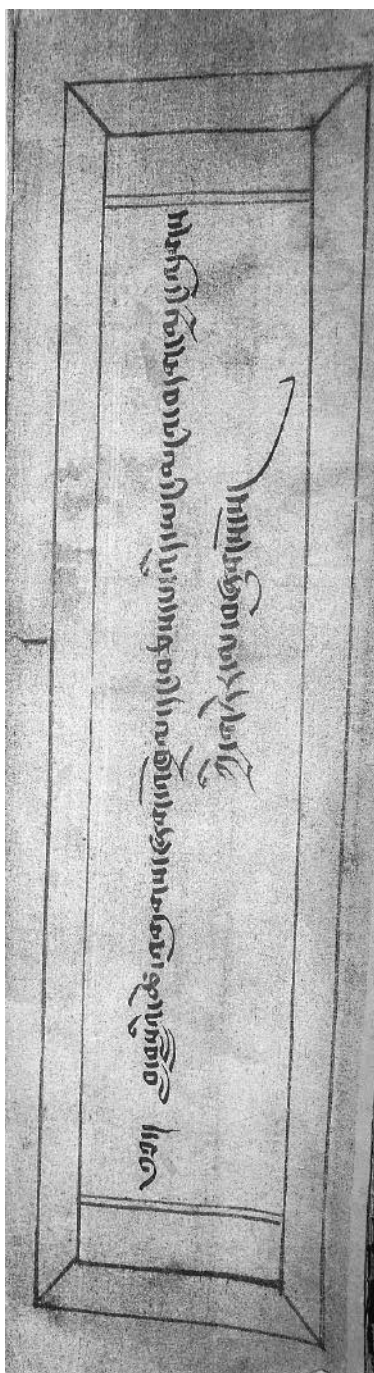
(14a) 掴む女／ 金剛の類のダーキニーよ／ 炎で光り輝く金剛で、封をせよ／ このツェをゆだね、この命をつなげよ／ これを護り、加護頂くよう祈ります／ 南方からツェを掴む女／ 宝珠の類のダーキニーよ／ 炎で光り輝く宝珠で、封をせよ／ このツェをゆだね、この命をつなげよ／ これを護り、加護頂くよう祈ります／ 西方からツェを掴む女／ 蓮の類のダーキニーよ／ 炎で光り輝く蓮で、封をせよ／ このツェをゆだね、この命をつなげよ／ これを護り、加護頂くよう祈ります／ 北方からツェを掴む女／ 縁起の類のダーキニーよ／ 光り輝く十字の金剛で、封をせよ／ このツェをゆだね、この命をつなげよ／ これを護り、加護頂くよう祈ります／ ラキヤラキャフムペー／ 金剛のツェに吉祥あれ／ 宝珠のツェに吉祥あれ／

(14b) 蓮のツェに吉祥あれ／ 白のツェに吉祥あれ／ 四女神に吉祥あれ／ 不変のラとソに封をせよと言って／ 他にも、吉祥を回向し祈るなどをも、考えよ
／ 我と同じパドマサンバヴァが／ ケー！／ 施主のツェの成就が成り得た
／ 穢れた劫のこの時に／ 生きとし生ける者の利益のために考えを巡らし／
新しい

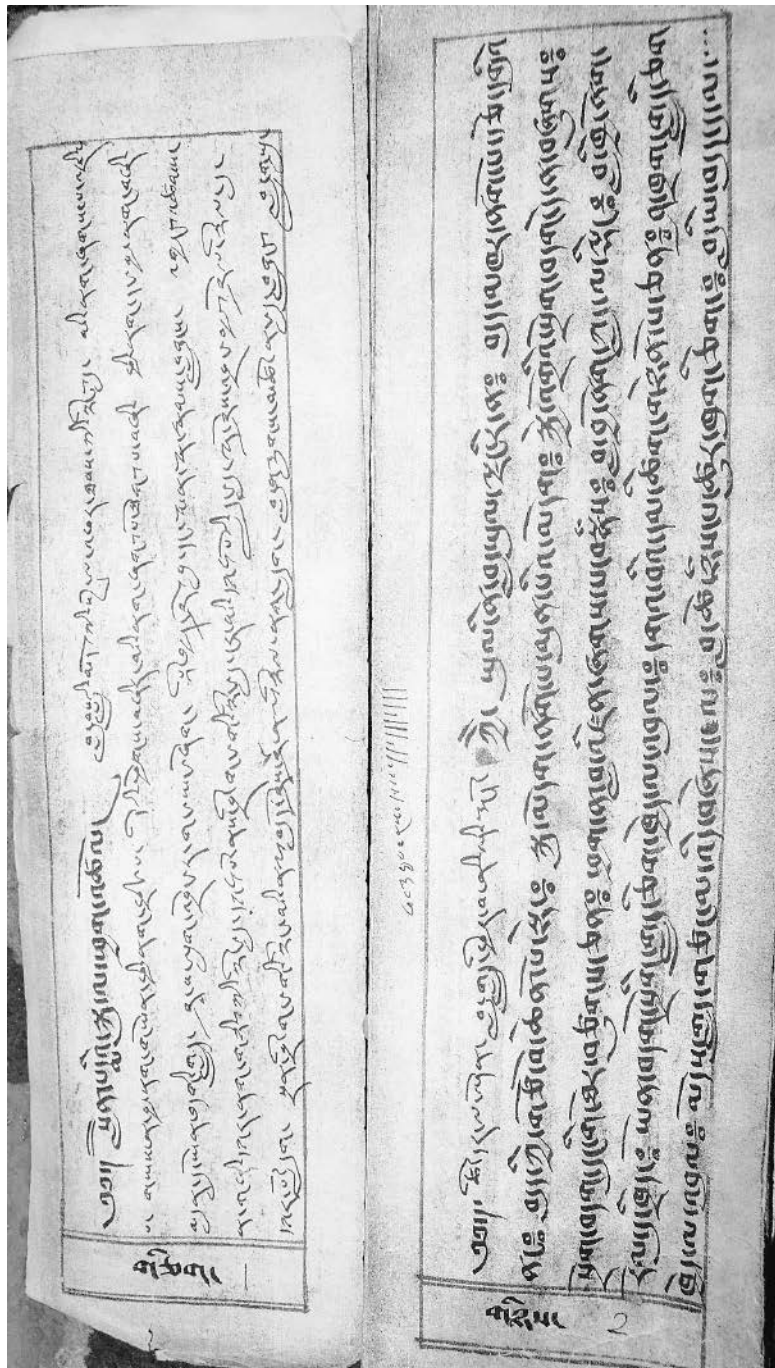
村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

(15a) 色の城をチベットに建てる／ それで宝である経を埋蔵した／ 生きとし
生ける者のツェと命を取り戻す縁に巡り合わせますように／ サマヤ／ ギャ／
ギャ／ ギャ／ 莊嚴な埋蔵の阿闍梨・パドマサンバヴァが行じられたラを取り
戻す儀軌、悪霊を退散させる埋蔵経の実践は、これにて終わり／

8 原テキスト

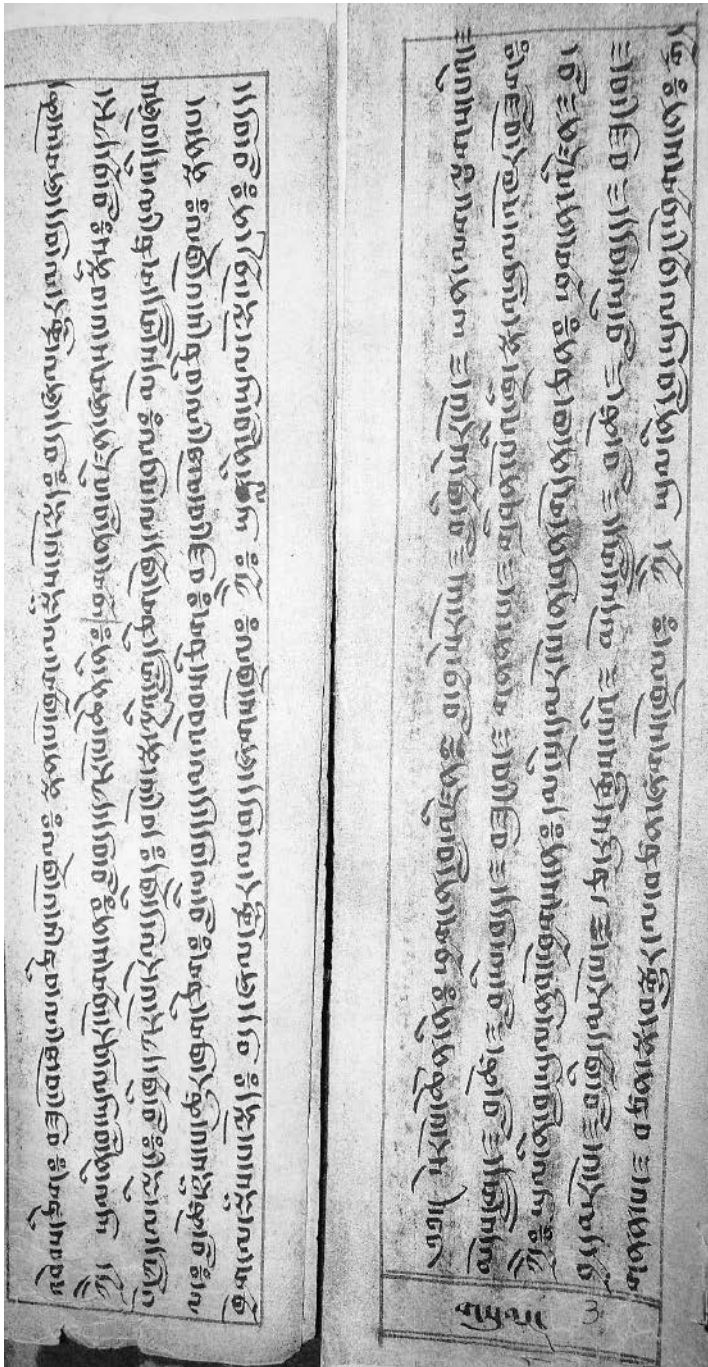


(folio 1a)



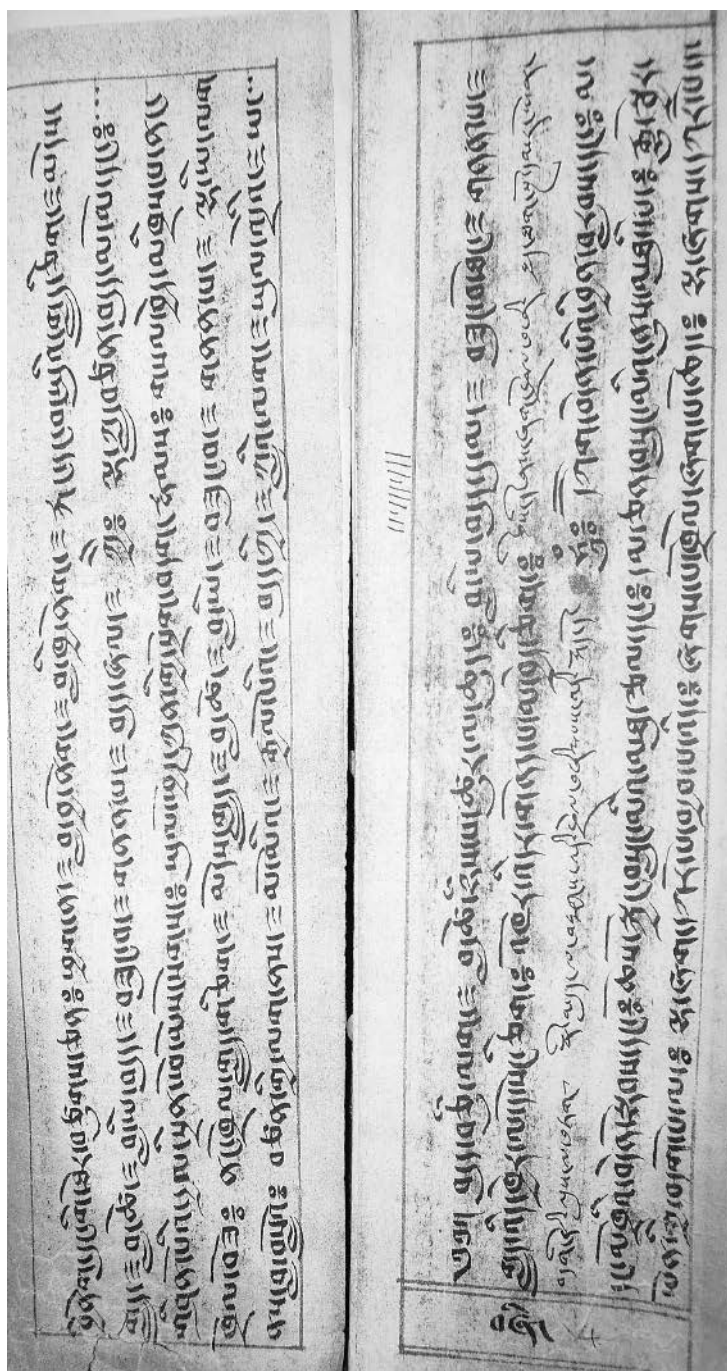
(folio 1b)

(folio 2a)



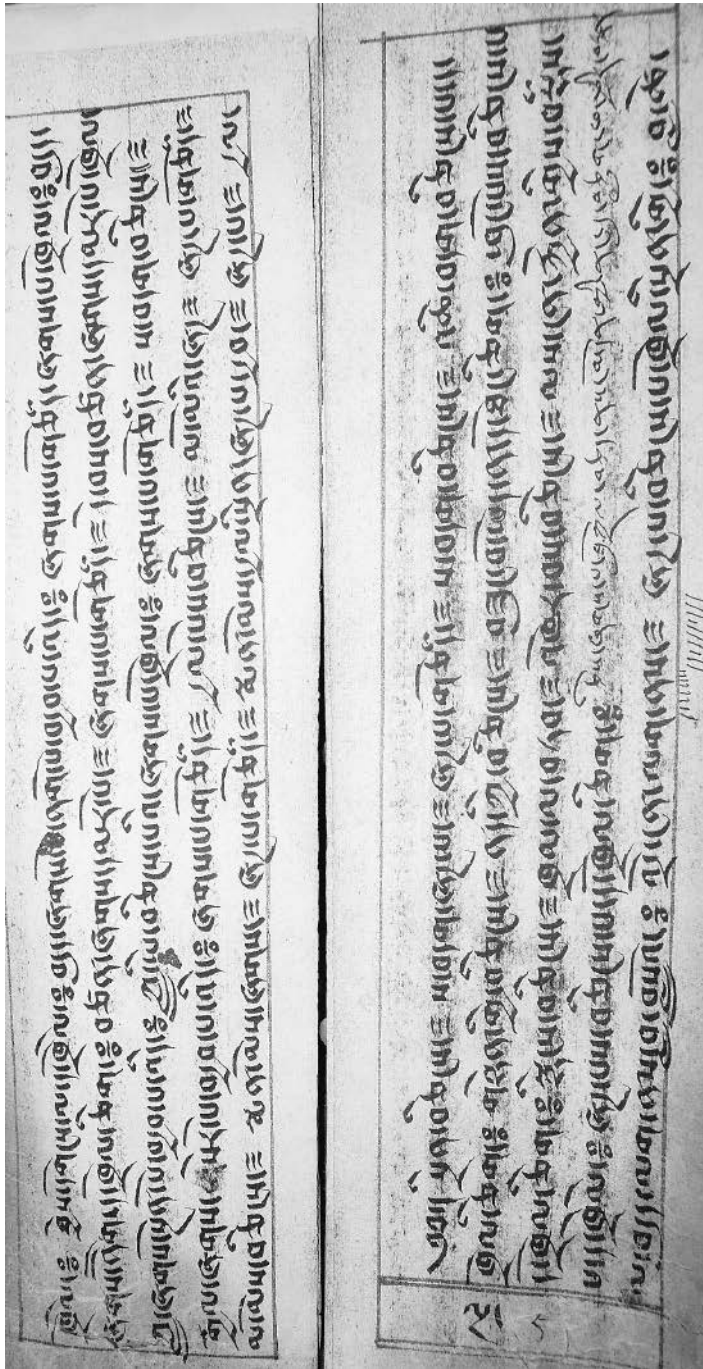
(folio 2b)

(folio 3a)



(folio 3b)

(folio 4a)



(folio 4b)

(folio 5a)

[illegible]

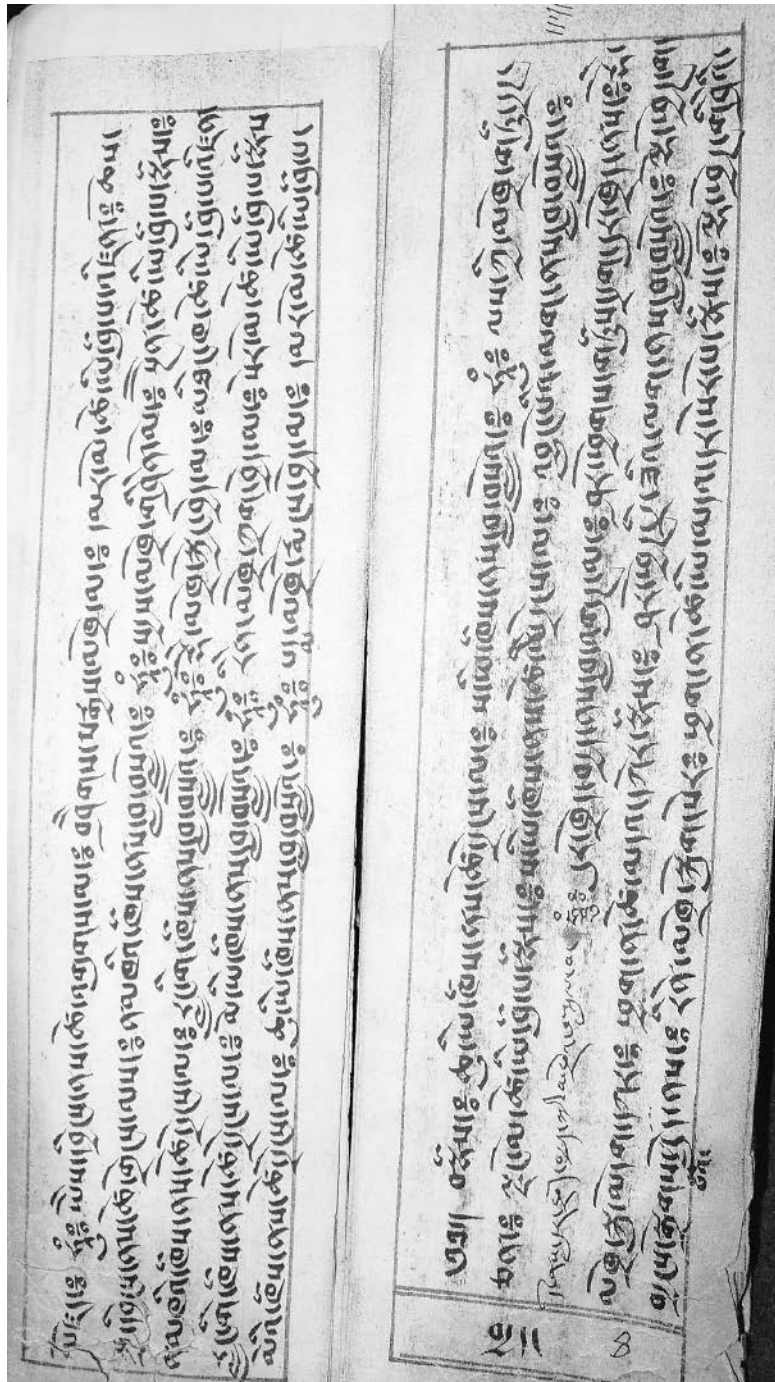
11/11/11

3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527

[illegible][illegible]

(folio 6b)

(folio 7a)



(folio 7b)

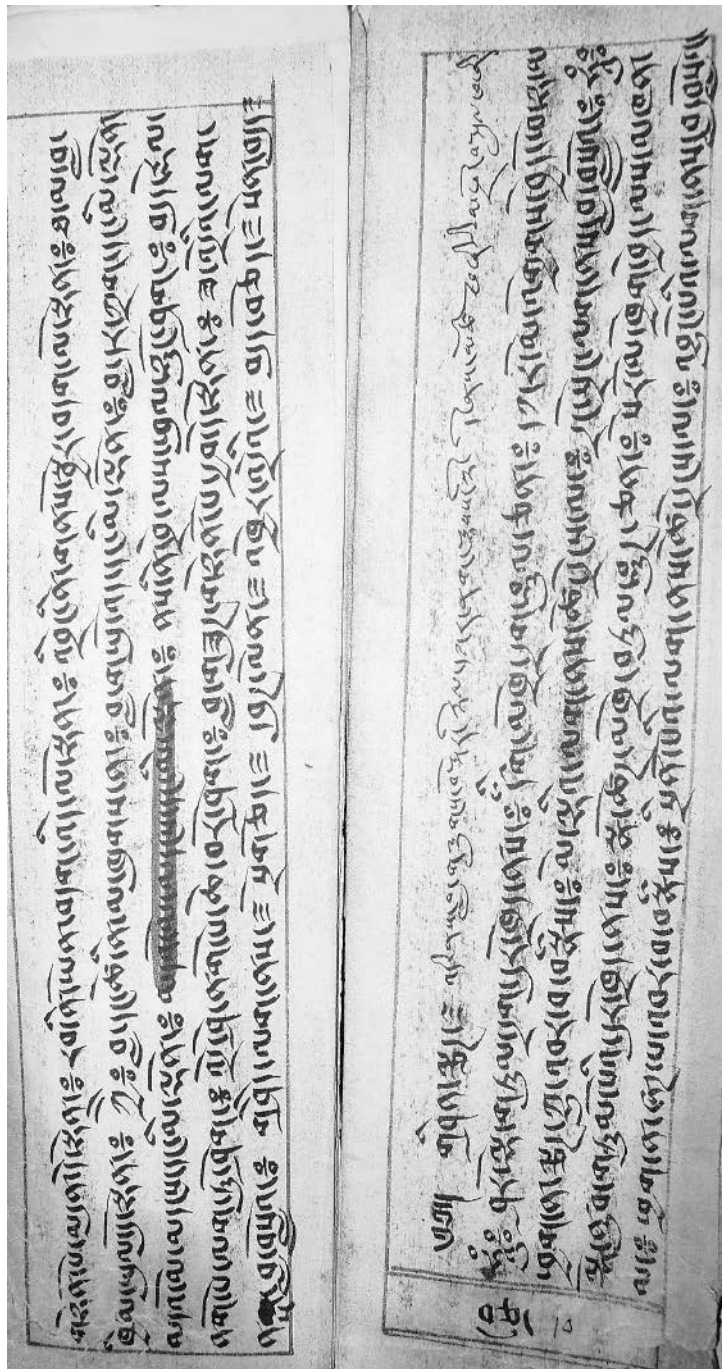
(folio 8a)

Handwritten text in a script, likely Burmese, on folio 8b. The text is arranged in a single column, written from right to left. It consists of approximately 12 lines of script. There are some marginal notes on the left side of the page.

(folio 8b)

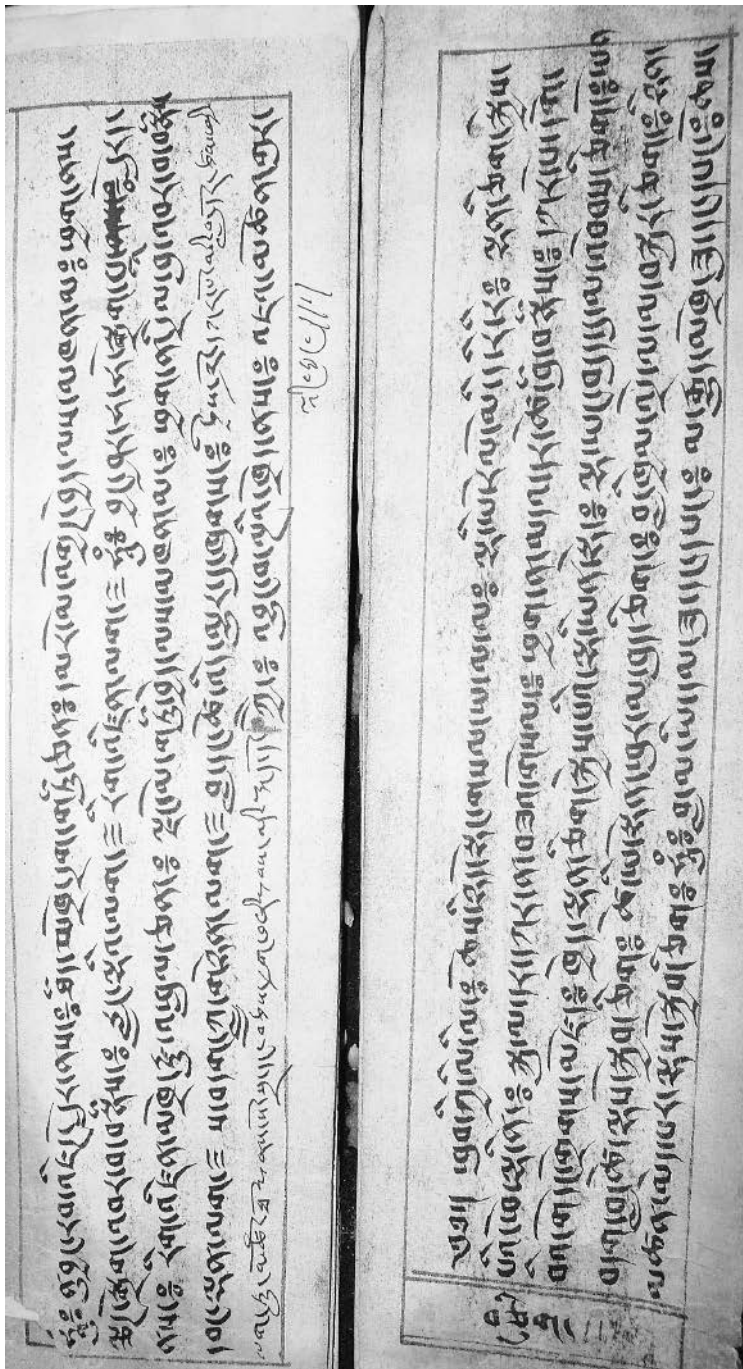
Handwritten text in a script, likely Burmese, on folio 9a. The text is arranged in a single column, written from right to left. It consists of approximately 12 lines of script. There are some marginal notes on the left side of the page.

(folio 9a)



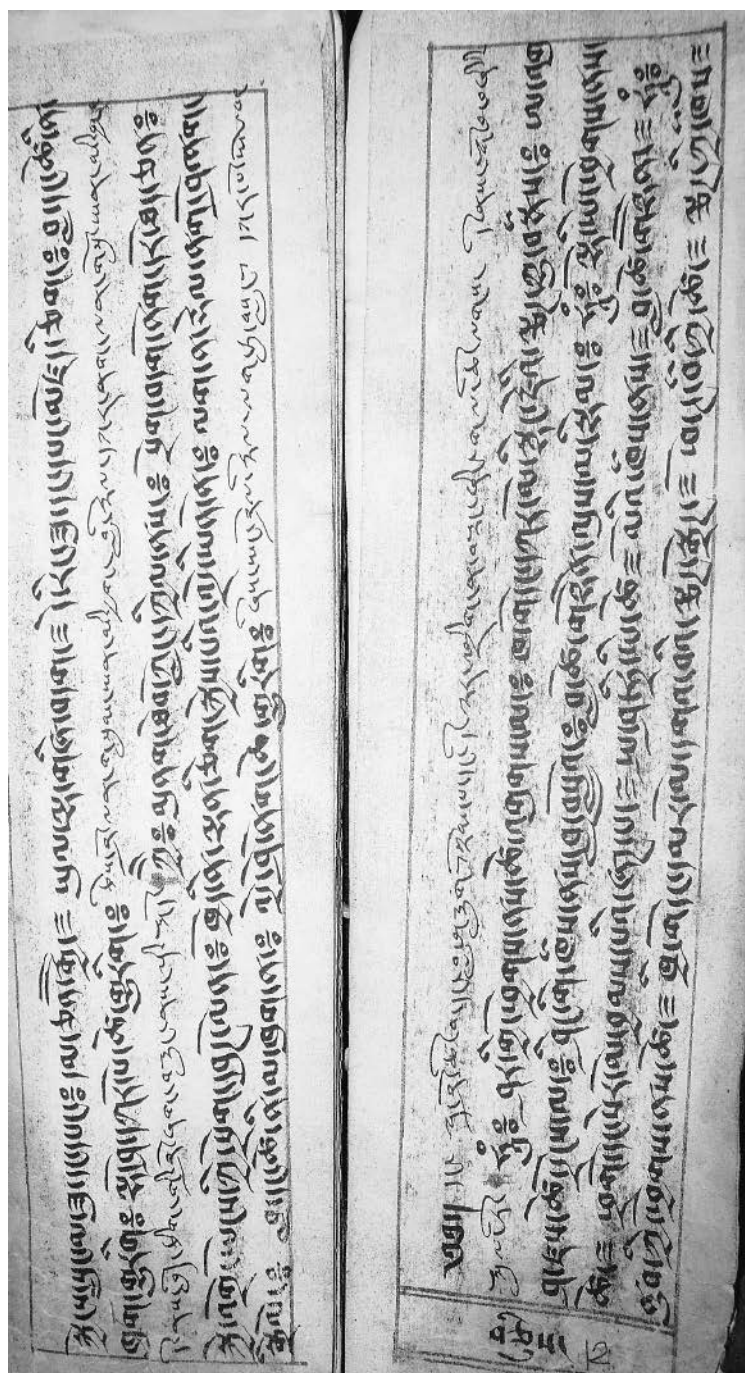
(folio 9b)

(folio 10a)



(folio 10b)

(folio 11a)

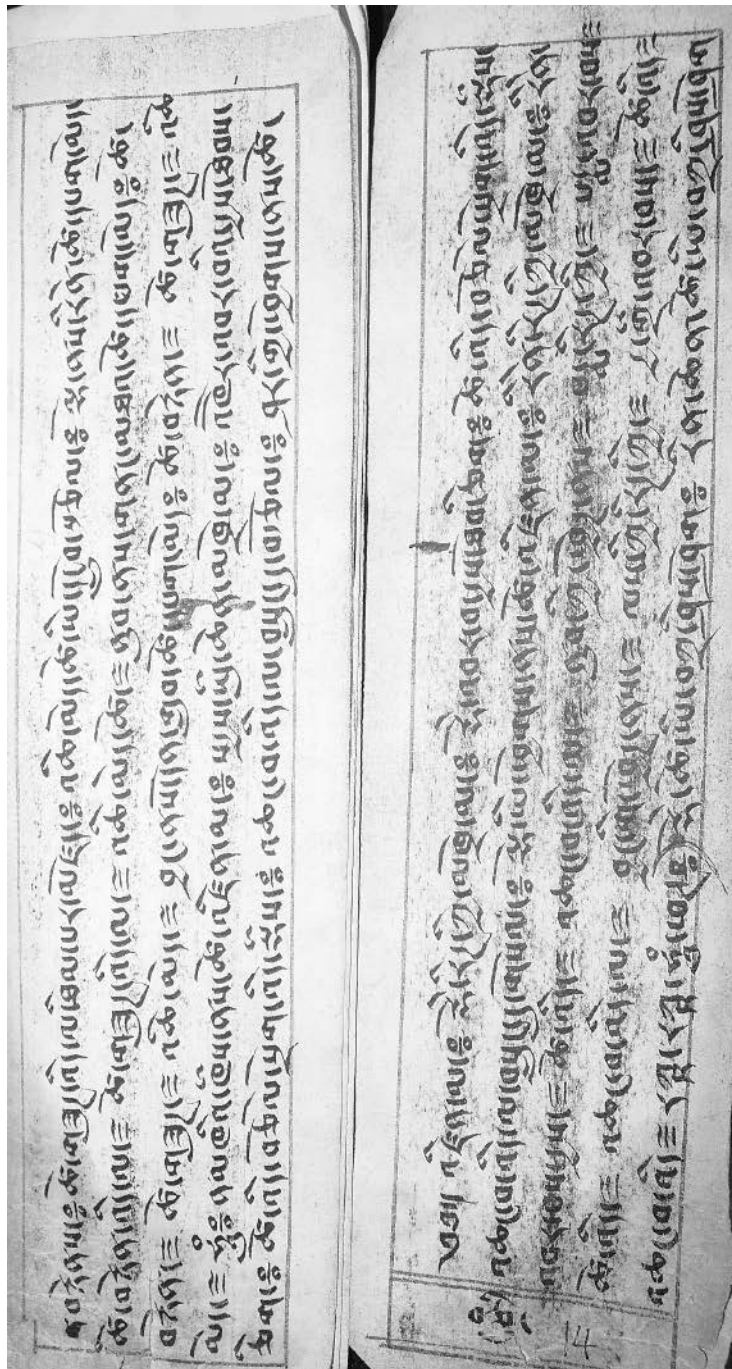


(folio 11b)

(folio 12a)

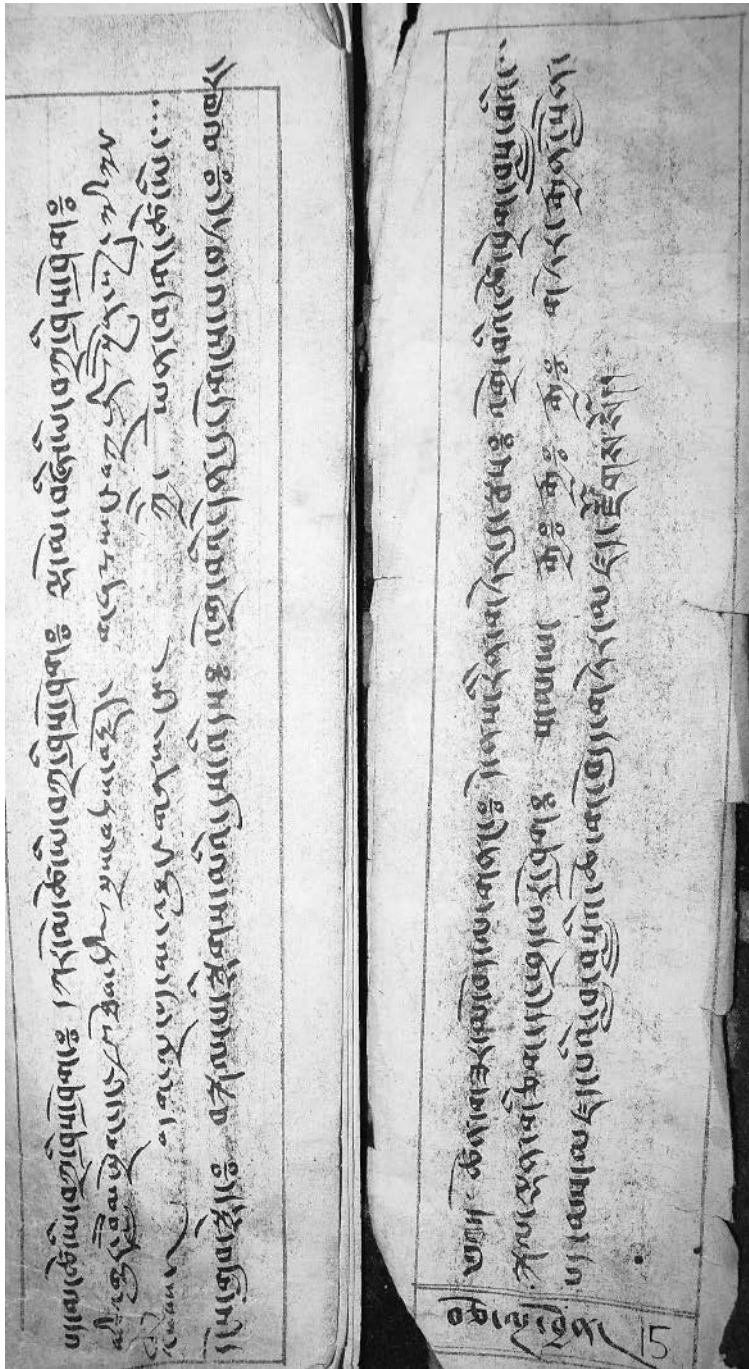
(folio 12b)

(folio 13a)



(folio 13b)

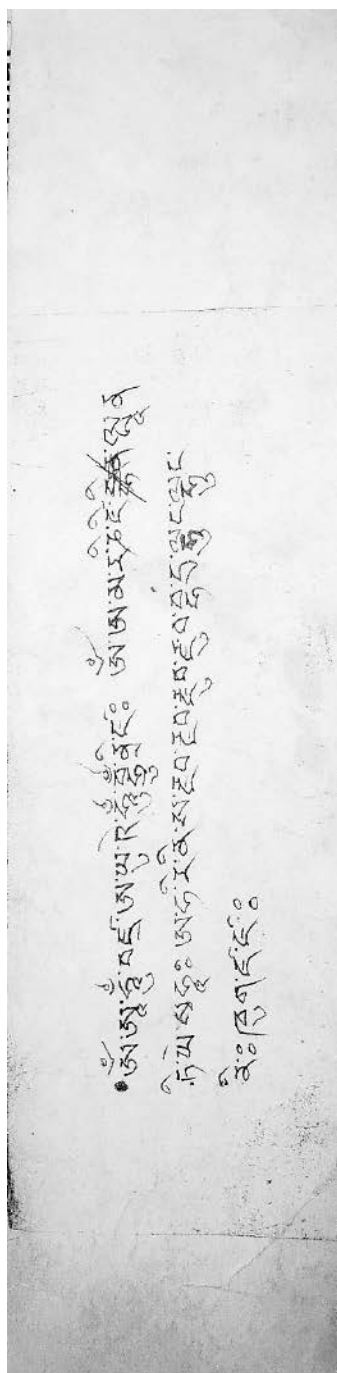
(folio 14a)



(folio 14b)

(folio 15a)

村上 「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)



(folio 10a) に挿入されるマントラ

謝 辞

本稿で紹介した祈祷書を解説・邦訳するうえで、著者の友人である巡礼僧テンジン・ドルジェ氏から多大なご教示を頂いた。ここに謝意を表したい。

注

- 1) 本稿では「儀軌」という用語のほか、その類義語である「儀礼」や「儀式」、そして「治療」、「祈祷」などといった言葉を用いている。それぞれニュアンスは異なり文脈に応じて使い分けているが、ほぼ同義語として用いている。
- 2) 昔から広く知られているようにシベリアやモンゴルなど中央アジアでは、悪霊の手に渡った人間の魂を奪還する祈祷がシャーマンによって営まれている。本稿で紹介するラグツェグでは手段は異なるものの、チベット仏教の僧侶によって類似の奪還プロセスがたどられる。Geoffrey Samuel の『Civilized Shamans』(1995) の解釈に沿うと、インドから密教の儀軌を取り入れたチベットの仏教行者たちは、原始ボン教や民間信仰の伝統を汲みながら、ある意味においてシャーマニックな存在——神仏や悪霊と直接交信（や同化）を行う者——として社会的・歴史的に機能してきたとされるが、本稿で扱うラグツェグはその具体例のひとつといえよう。
- 3) Rje thu'u kwan chos kyi nyi ma'i gsung bla 'gugs tshe 'gugs kyi cho rin chen srog gis chad mthud (国立民族学博物館所蔵 資料 ID: F106001483)
- 4) 筆者自身、2014 年 8 月ラサにおいてゲルグ派の僧侶からラグツェグの儀礼を受けたことがあるが、今回の報告ではその民族誌的記述を試みたい。そこでは、様々なタイプのラグツェグの儀礼について比較・考察し、チベット宗教文化におけるこの儀礼の位置づけについて議論を深めていくつもりである。
- 5) 筆者は自身のフィールドノートから一部抜粋し、一般向け図書『チベット 聖地の路地裏——八年のラサ滞在記』(2016 年 法蔵館) を上梓したが、このなかで、現代ラサにも探求すべき宗教文化のトピックが数多く残っていることを示したつもりである。これからラサでフィールドワークを試みる後進たちの、なにかしらの参考になれば幸いである。
- 6) 筆者は 2000 年～2014 年までチベット自治区をはじめ、北インド・ネパールなどでフィールド調査を行ったが、その際、チベット本土・亡命問わず多くのチベット人研究者と交わる機会を得た。
- 7) 「魂の喪失の病」と類似したものに「チンバ・バップ」(mchin pa 'bab) というものがある。これは主に小さな子供に発症するといわれ、文字通り「肝臓」(チンバ) が体の下方に「堕ちる」(バップ) 病と言われる。魂の喪失の場合と同じく、度を越えた恐怖や驚愕が原因とされているが、発熱や倦怠感などの症状があらわれる。治療法としては、メロンと呼ばれる祈祷用の金属の円盤を用いて、「肝臓を上部に戻す」儀式を行うのだが、治療者は特に医者や僧侶である必要はないようである。日本語でも「肝を潰す」「肝を抜かれる」などといった表現があるが、チンバ・バップは類似の心身体験であると解釈してよいであろうか。
- 8) このインフォーマントの村は正確には、ネパールとの国境にある定結県(定結)の陳塘(dren thang) という村である。シェルバが大半を占める千人規模の小さな村落であり、サンマと呼ばれる神降ろしの女性が数人ほどいるらしい。インフォーマントによれば、このサンマは地元の護法神や土地神など複数の異なった神を、目的に応じて降ろすようである。魂(ラ)の奪還も行うという。そのプロセスはまず、土地神など俗神の力を借りて、魂を奪った悪霊の所在をつきとめることから始まり、次に、その悪霊を降ろし、魂を返してもらうために供物を捧げながらその悪霊と直に交渉するものであるという。この村落では僧院もなく出家僧侶も不在であるためか、ラグツェグの儀礼は行われていないようである。
- 9) ラサにおけるタブチラモ女神信仰に関する民族誌的・歴史的議論に関しては、Murakami (2013) を参照されたい。
- 10) 水曜日はグライ・ラマの魂曜日「ラサー」(bla gza') である。ラサーに関しては後述する

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

(本稿 4.2.)。

- 11) この引用は、作者不明の『Srid pa'i gter khyim sgron me』と呼ばれる経典からである (Samten 1998[1987]: 315)。mthu byed na lus gsod dam sems gsod/ lus brdos pa can bem po 'di bsad kyang mi 'chi/ sems stong pa la bsad rgyu ci yod. zhe na/ lus sems gnyis ka mi gsod de/ bla lug rdzi bo med pa bzhin du 'khyams pa ste … bkug ste/
- 12) Tucci (1988[1980]: 192)
- 13) 本稿で紹介する祈祷書では、folio (11a)。
- 14) Samuel (1985: 389; 1995: chapter1)
- 15) ポラやユラへの参拝は勧められるものの、その宗教実践はラサでは急速に廃れてきている。ラサに居住しているチベット人は、遠く農村地域から出てきた者が多く、定められた時期に帰郷して参拝できないのがその直接的な理由である。また、非常に嫉妬深いとされるこれらの俗神は、自分の都合のよいときにだけ参拝に来る信者に対しては逆に害を与えることもあるという。その結果、(たとえ本意ではなくとも) これらの神と縁を断ち切る人々が増えてきている。
- 16) リクスムゴンボ寺の北院はガリ尼僧院 (gar ri dgon), 南院はガンデン僧院 (dga' ldan dgon) がそれぞれ管理している。東院は、かつてジョカン寺東方のイスラム寺院近隣にあったが、現在は存在しない。
- 17) 悪霊ミカとその祓いの祈祷書に関しては、村上 (2013) を参照されたい。
- 18) ラグツェグの儀礼は現世に関する呪術であるため、現世利益を齎すとされる護法神 ('jig rten pa'i srung ma) の御前で行うのが望ましいとされているようである。タブチゴンパのラグツェグでは、タブチラモ女神の御前であり、筆者が2014年に調査したツェモリンでは、ゲルグ派の護法神・ヤマーンタカ ('jigs byed) のトルマが儀軌のために特別に準備された。
- 19) チベットの占星術では、「魂の曜日」(bla gza') や、自分の生まれた曜日「ケーサー」(skyes gza') は、物事を新しく始めるのにふさわしい吉祥の曜日とされている。このほか「シェーサー」(gshed gza') —「敵の曜日」— というのがあるが、この日は運気の下がる曜日なので注意が必要といわれる。
- 20) Ramble (2009: 219) は、ボン教の僧によるラグツェグ儀礼の恣意的操作について言及している。テキストに書かれていない儀軌のルールを僧自らが作り変えるその恣意性は、必ずしも儀礼の効果を減じるものなのではなく、悪霊から魂を奪還するプロセスのなかで、「騙し」(cheating) のテクニックのひとつとしてポジティブに捉えられるという。
- 21) Rin chen gter mdzod. Vol.77 (Thimpu. n.d.)
- 22) 主だった箇所を挙げると、筆写版のフォリオ (4a) 1段目～(6a) 5段目、(12a) 2段目～(12b) 5段目まではプリント版には記載されていない。
- 23) zhag 'khrol は、後に続くテキスト内容から zhags 'grol の誤記であると解釈し訳出した。
- 24) 'gyangs 'tshams は文脈上、gang 'tshams の誤記と解釈し訳出した。
- 25) shos は sho の誤記と思われる。
- 26) 'brang は 'brongs の誤記と解釈し訳出。
- 27) nan は nag の誤記と思われる。
- 28) shos は bshos の誤記と思われる。
- 29) blu は bla の誤記と思われる。
- 30) dce を rtse の誤記と解釈し訳出。
- 31) btsugs は gtsug の誤記と思われる。
- 32) gnyen po を gnyan po の誤記と解釈し訳出。
- 33) プリント版では gnyan po (凶悪な／聖なる) となっており、「聖なる」としても意味は通るが、nyams のままで訳出した。原テキストの nya の上に記された「m」を表わす記号に注意されたい。
- 34) プリント版を参照し、snan を mnan の誤記と解釈し訳出した。
- 35) sdams を bsdams の誤記と解釈し訳出。
- 36) rgyur は 'gyur の誤記と思われる。
- 37) 脚注 33 に同じ。
- 38) mthong は thong の誤記と思われる。
- 39) 脚注 34 に同じ。
- 40) 脚注 35 に同じ。

- 41) 脚注 36 に同じ。
- 42) 文脈上, *yan lag* は *yon bdag* の誤記と解釈し, 訳出した。
- 43) プリント版を参照し, *gnan* を *mnan* と解釈し訳出。
- 44) *khrim* は *khri* の誤記と思われる。
- 45) *can* を *chen* の誤記と解釈し訳出。*kha chen* とは, ツェンと呼ばれるチベットの悪霊の一種である。
- 46) この *bla* は原文テキストでは略されているが, あるものとして訳出。
- 47) 意味不明な語。文脈からすると, *yon bdag* の誤記ではないかと考えられる。その解釈で訳出した。
- 48) 脚注 43 に同じ。
- 49) *khrol* を *'grol* の誤記と解釈し訳出。
- 50) *rgya* を *brgya* の誤記と解釈し訳出。
- 51) *btsugs* は *gtsug* の誤記と思われる。
- 52) 脚注 43 に同じ。
- 53) *bzo* は *zo* の誤記と思われる。
- 54) 脚注 43 に同じ。
- 55) *bcum* は *bcu* の誤記と思われる。
- 56) 脚注 43 に同じ。
- 57) *re'i* を *de'i* の誤記と解釈し訳出。
- 58) *mdud* は *bdud* の誤記と思われる。
- 59) *brtags* を *btags* の誤記と解釈し訳出。
- 60) *yi* は *yis* の誤記と思われる。
- 61) *zhag* は *zhags* の誤記と思われる。
- 62) 同上。
- 63) *yi* は *yis* の誤記と思われる。
- 64) *mos* は *mo'i* の誤記と思われる。
- 65) *mos* は *mo* の誤記と思われる。
- 66) *gyi* は *gyis* の誤記と思われる。
- 67) *kyi* は *kyis* の誤記と思われる。
- 68) *bstams* を *brtas* の誤記と解釈し訳出。
- 69) *bukrol* を *bkrol* の誤記と解釈し訳出。
- 70) *mdon* は *mdos* の誤記と思われる。
- 71) *gnyen* を *mnyam* の誤記と解釈し訳出。
- 72) *'bras* を *'bru* の誤記と解釈し訳出。
- 73) *gyi* は *gyis* の誤記と思われる。
- 74) *the* は *the'u* の誤記と思われる。
- 75) *ri'u* は意味不明な言葉であるが, ゴンボ寺の僧侶によると *rtsub po* (悪戯好きな, 手に負えない) の意味があるという。訳出にはそれを採用した。
- 76) *lan* は *lag* の誤記と思われる。
- 77) 文脈を考えると *dngos* (直接, 真正) は不自然であるため, *song* の誤記であると解釈し訳出した。
- 78) ゴンボ寺の僧侶によると, *sngo thag* は *bla rkang* (羊の脚の骨) の誤りであるという。その解釈を採用し訳出した。本来なら別の人間がダタルと羊の骨を持ち, 家の屋上などで「ラよ戻ってこい」と叫ぶ (*bla skad*)。
- 79) ゴンボ寺の僧侶によると, 原テキストのこの部分に番号「3」が書かれてあるのは, 三行目から四行目にかけて書かれている八方の祈祷を「三回繰り返す」の意味であるという。
- 80) *kham* は *kham*s の誤記と思われる。
- 81) *'gu* は *'gug* の誤記と思われる。
- 82) プリント版を参照し, *zhal* を *gzhal* の誤記と解釈し訳出した。
- 83) *rdo rje* であるが, 原文では *rdo* と *e* が合体している。
- 84) プリント版を参照し, *rnams* を *bsnams* の誤記と解釈し訳出した。
- 85) プリント版ではこの箇所は, *thugs dam gnad nas sku bskyod la* (瞑想でマルマ (命の髄) から体を震わせている) とある。

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

- 86) phyugs は phyug の誤記と思われる。
- 87) プリント版を参照し, snams を bsnam の誤記と解釈し訳出した。
- 88) la は ma の誤記と思われる。
- 89) プリント版を参照し, grengs を drongs の誤記と解釈し訳出した。
- 90) snams を bsnam の誤記と解釈し訳出。
- 91) プリント版を参照し, drengs を drongs の誤記と解釈し訳出した。
- 92) 同上。
- 93) プリント版を参照し, krag を drag の誤記と解釈し訳出した。
- 94) 脚注 90 に同じ。
- 95) 脚注 91 に同じ。
- 96) 脚注 91 に同じ。
- 97) gtum drags は gtum drag の誤記と思われる。
- 98) 脚注 90 に同じ。
- 99) 脚注 91 に同じ。
- 100) dur khrod brgyad は dur khrod chen po brgyad の略だと思われる。
- 101) gtums drag は gtum drag の誤記と思われる。
- 102) 脚注 90 に同じ。
- 103) brgyangs は rgyangs の誤記と思われる。
- 104) 脚注 90 に同じ。
- 105) 脚注 90 に同じ。
- 106) 脚注 90 に同じ。
- 107) mgong は 'gong の誤記と思われる。
- 108) ゴンボ寺の僧侶によると, 原テキストのこの部分に番号「3」が書かれてあるのは, 8b の四段目から 9a の三段目までの祈禱を「三回繰り返す」の意味であるという。
- 109) rma は ma の誤記と思われる。
- 110) プリント版を参照し, krag を bkrag の誤記と解釈し訳出した。
- 111) プリント版を参照し, gnyen を gnyan の誤記と解釈し訳出した。
- 112) プリント版を参照し, krag を bkrag の誤記と解釈し訳出した。
- 113) プリント版を参照し, nyen を gnyan の誤記と解釈し訳出した。
- 114) sen bdud を bdud srin の誤記と解釈し訳出。
- 115) ここまで読経し終わった時点で, マントラを何度か唱える。そのウチェン表記を本稿第八章原テキストの最終頁に挿入した。その音写は, 「オム, アー, フム, ペンツァルアユケフムドォムニルザ, オムアーマラニジウェンティエサハ, アハリニサザブザブズブズバタフンフンニ, クザザ」。
- 116) プリント版を参照し, snyabs を snyob の誤記と解釈し訳出した。
- 117) 脚注 91 に同じ。
- 118) プリント版を参照し, khyog を mgyogs の誤記と解釈し訳出した。
- 119) 脚注 91 に同じ。
- 120) プリント版を参照し, 'gyogs を mgyogs の誤記と解釈し訳出した。
- 121) nas は na の誤記と思われる。
- 122) thon を thog の誤記と解釈し訳出。
- 123) プリント版を参照し, ston を brtan の誤記と解釈し訳出した。
- 124) プリント版を参照し, khyim を 'khyams の誤記と解釈し訳出した。
- 125) zu を gzu の誤記と解釈し訳出。gzu dpang で仲介人, 証人の意。
- 126) 同上。
- 127) 脚注 125 に同じ。
- 128) 脚注 125 に同じ。
- 129) プリント版を参照し, cig を na の誤記と解釈し訳出した。
- 130) tshe を che の誤記と解釈し訳出。
- 131) zhag を nag の誤記と解釈し訳出。
- 132) shol を sho の誤記と解釈し訳出。
- 133) gnyen を mnyam の誤記と解釈し訳出。
- 134) ゴンボ寺の僧侶によると, phrag dong は phag gdong の誤記であるという。その指摘に沿っ

- て訳出した。
- 135) 脚注 133 に同じ。
- 136) lcags sgrongs は lcags sgrog の誤記と思われる。
- 137) 脚注 133 に同じ。
- 138) ゴンボ寺の僧侶によると、rtags nyoms は 'dra mnyam の誤記であるという。その指摘に沿って訳出した。
- 139) 脚注 133 に同じ。
- 140) sing は seng の誤記と思われる。
- 141) 脚注 133 に同じ。
- 142) bcod は gcod の誤記と思われる。
- 143) 脚注 133 に同じ。
- 144) sten は rten の誤記と思われる。
- 145) 'dzug は mdzub gu の誤記と思われる。
- 146) プリント版を参照し、brgyas 'debs を rgyas gdab の誤記と解釈し訳出した。
- 147) 原文の筆写版ではこの部分が消えているので、ゴンボ寺の僧侶から教示を受けた。
- 148) gnang は snang の誤記と思われる。
- 149) プリント版を参照し、brten を rten の誤記と解釈し訳出した。
- 150) プリント版を参照し、brten を brtan の誤記と解釈し訳出した。
- 151) scol は bcol の誤記か。
- 152) 脚注 148 に同じ。
- 153) 脚注 150 に同じ。
- 154) 脚注 151 に同じ。
- 155) 脚注 149 に同じ。
- 156) プリント版を参照し、gnang を snang の誤記と解釈し訳出した。snang mtha' は、snang ba mtha' yas (無量光仏、阿弥陀仏)。
- 157) 脚注 149 に同じ。
- 158) 脚注 149 に同じ。
- 159) プリント版を参照し、'bar ba'i rgyas thobs を 'bar bas rgyas thob の誤記と解釈し訳出した。
- 160) プリント版を参照し、sdams を sdoms の誤記と解釈し訳出した。
- 161) 後から出てくるように、bcol は gsol の誤記と思われる。
- 162) ba は bas の誤記と思われる。
- 163) 脚注 160 に同じ。
- 164) ゴンボ寺の僧侶によると、blaum は bla の誤記であるという。その指摘に沿って訳出した。
- 165) この語句は不明瞭であるが、ゴンボ寺の僧侶によると bsams の意味であるという。その解釈で訳出した。
- 166) gzar は gsar の誤記と思われる。
- 167) bdudo は bdud bzlog と解釈し訳出した。
- 168) 本研究のインフォーマントの一人であるテンジン・ドルジェ氏によると、「ニャン」とはこの経典を筆写した昔のラマの名であるとのことだが、実際のところは不明である。古代チベットの土侯にニャン族と呼ばれる氏族がいるが、関連性は限りなく低いと思われる。
- 169) ラグツェグの別名。
- 170) 原文の綴りでは shos bu となっているが、bshos bu (ショブ) の誤記であろう。ショブとはトルマと同じく、ツァンパで作られた供物の一種である。
- 171) デー (bre) とは穀物などの容積を示すチベット古来の単位であり、1 デーは約 1 リットルに相当する。
- 172) ンガルミ (ngar mi) とは、クライアントの身代わりとなるツァンパで作られた人形のことであるが、実際の儀軌では、やや雑に作られた小さな棒状のトルマであった。^{ひとがた}
- 173) バターから作られた羊のフィギュア。
- 174) ラグツェグの儀礼のため、クライアントによって特別に準備されたトルコ石。
- 175) 五彩色の祈祷の矢。
- 176) (クライアントの) 命の主、魂の所有者の総称。脚注 183 を参照。
- 177) チベット仏教でいうところの「五器官」とは、目 (mig)、耳 (rna ba)、鼻 (sna)、舌 (lce)、身 (lus) を指す。

村上 「魂」(bla) を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」(bla 'gugs tshe 'gugs)

- 178) 魔の一種。仏教の戒律を破る精神の具現化として捉えられている。邪心の精霊。
- 179) チベットの悪霊の一種。奇態な形の岩石など地上の自然物に棲むといわれる。
- 180) 「切れる」は「緩む」の可能性もある。
- 181) lha の日本語訳は「神」であるが、この lha は人間や動物と同じく欲望をもち、現世に生きる神であることから「俗神」(jig rten gyi lha) と訳した。
- 182) 破戒僧の浮遊霊。直前に出てくるマモとは、ゲルボの伴侶である魔女を指す。
- 183) ここでわかるように、ソダとは、俗神、龍神、ツェン、魔、マモ、死のゲルボや男女の羅刹など、魂を掠めるすべての霊的存在の総称である。
- 184) 原文は dkon mchog (至宝) だが、dkon mchog gsum (仏法僧の「三宝」と解釈した。
- 185) 草原などに棲んでいるといわれる魔女の一種。
- 186) タムラタブ (khrām la btab) とは、戒律を破った者に呪いをかける呪術の一種であるが、もしその解釈が正しいとすると、前後の文脈とはあまり合致しないように思われる。
- 187) この「羅刹」という言葉は、文脈上、不自然であるように思われる。誤りか。
- 188) srog の訳語として「命」をあてた。ツェ (tshe) の訳語も「命」であるが、ここでは混同を避けるため、後者は「ツェ」とした。本文「ラとツェが命のなかに溶け込むよう」は論理的には意味不明であるが、ラが身体にしっかりと留まるよう懇願する祈祷文であろうことは推測できる。
- 189) 原テキストの srid pa'i 'dre dgu は、「シバ」(srid pa) の「九つの神霊」('dre dgu) であることから、これはシバホ (srid pa ho) のタンカに描かれる、五行思想における九宮 (sme ba dgu) の神霊を指すと思われる。
- 190) 五色の祈祷の矢。
- 191) 「ラよ、戻って来い」と叫ぶ。ゴンボ寺の僧侶によると、本来ならばラグツェグの儀礼を行っている僧が叫ぶのではない。別の人間が、五色の矢と羊の骨を家の屋上などに持って行き、それらを高く挙げ、頭上で回転させながら、ラが戻ってくるように祈り叫ぶ。
- 192) 中央チベットのウ地方。
- 193) ラサのポタラ宮殿を指すのであろうか。
- 194) 馬頭明王と金剛牝豚のカップルを指す。
- 195) Dhatvishvari. 空間女王。密教における大日如来の女神パートナーともいわれる。
- 196) 神仏の使者。
- 197) 原文 ki la ya を ki la ya の誤記と解釈し訳出。
- 198) 悪霊ゲルボ (脚注 182) の一種。
- 199) ダタルの祈祷矢に結び付けられた五色の旗を指す。
- 200) 脚注 171 に同じ。
- 201) ブル (phul) はデー (bre) の 1/6 の容積単位。
- 202) ラグツェグを執り行っている僧侶自身の方向。
- 203) 筆者の観察によれば、実際ラスクが祈祷僧の方向を向いても、それがたとえクライアント (施主) から見て逆方向であっても、「まずまず成功した」という解釈を下していた。
- 204) 餓鬼の一種。
- 205) 索命鬼。閻魔の家来。
- 206) ソクチョの綴りは srog-gcod (「命」―「切る」) であることから、「殺生魔」とでも訳せようか。
- 207) 生氣・息を奪う者。
- 208) キョル (*khyor) は「よろよろ歩く」の意であることから、浮遊霊のことか。
- 209) 魔の一種だと思われるが、不明。
- 210) 地獄に堕ちた死人に拷問を与える鬼神。
- 211) この部分のマニュアル解説は意味がやや不明瞭であるため、ラグツェグの儀礼を執り行っているゴンボ寺の僧侶の解説をもとに原意を再構成した。彼の説明によると、dor は「失う」の意、so pra は「歯を食いしばる」の意であるという。
- 212) 本稿第三章を参照されたい。
- 213) 「門の四神」(sgo ba bzhi) のひとつだと思われるが、正体不明。
- 214) 同上。
- 215) 脚注 213 に同じ。
- 216) 脚注 213 に同じ。

- 217) ダーキニーの一種か。
 218) ゴンポ寺の僧侶によると, khur bu で「背負い袋」を表わす。
 219) この真言部分の発音は, ゴンポ寺の僧侶の教示による。

参 照 文 献

- Bawden, C. R.
 1962 Calling the Soul: A Mongolian Litany. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London* 25(1/3): 81–103.
- Karmay, S. G.
 1998[1987] The Soul and the Turquoise: a Ritual for Recalling the bla. In S. G. Karmay (ed.) *The Arrows and the Spindle: Studies in History, Myths, Rituals and Beliefs in Tibet*, pp. 310–338. Kathmandu: Mandala Book Point.
 2003 Une note sur l'origine du concept des huit catégories d'esprits. *Revue d'Etudes Tibétaines* 2: 67–80.
- Lessing, F. D.
 1951 Calling the Soul: A Lamaist Ritual. In W. J. Fischel (ed.) *Semitic and Oriental Studies: A Volume Presented to William Popper*, pp. 263–284. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Mumford, S. R.
 1989 *Himalayan Dialogue: Tibetan Lamas and Gurung Shamans in Nepal*. Wisconsin and London: University of Wisconsin Press.
- Murakami, D.
 2013 The Trapchi Lhamo Cult in Lhasa. *Revue d'Etudes Tibétaines* 27: 21–54.
- Nebesky-Wojkowitz, R. de
 1993[1956] *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*. Delhi: Book Faith India.
- Ramble, C.
 2009 Playing Dice with the Devil: Two Bonpo Soul-retrieval Texts and Their Interpretation in Mustang, Nepal. *East and West* 59(1–4): 205–232.
- Samuel, G.
 1985 Early Buddhism in Tibet: Some Anthropological Perspectives. In B. N. Aziz and M. Kapstein (eds.) *Soundings in Tibetan Civilization*, pp. 383–397. Delhi: Manohar.
 1995 *Civilized Shamans: Buddhism in Tibetan Societies*. Washington DC and London: Smithsonian Institution Press.
- Sárközi, A. and A. G. Sazykin
 2004 *Calling the Soul of the Dead: Texts of Mongol Folk-Religion in the St. Petersburg Institute of Oriental Studies* (Silk Road Studies IX). Turnhout, Belgium: Brepols Publishers.
- Stein, R. A.
 1972[1962] *Tibetan Civilization*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Tucci, G.
 1988[1980] *The Religions of Tibet*, translated by G. Samuel. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 村上大輔
 2013 「悪霊ミカ蔵いの祈祷書 *Mi kha'i bzlog 'gyur* 校注」『国立民族学博物館研究報告』38(1): 91–118。
 2016 『チベット 聖地の路地裏——八年のラサ滞在記』京都：法蔵館。